

# 近代文学作品における「が／の」交替

中 村 嗣 郎

## 1. 「が／の」交替

### 1.1 はじめに

本稿は近代文学作品（近代日本語）における「が／の」交替の現象を取り上げる。Harada (1971) 以降、特に理論言語学の分野において、この現象は盛んに議論され、*The Oxford Handbook of Japanese Linguistics* および *Handbook of Japanese Syntax* でもそれぞれ Maki & Uchibori (2008), Ochi (2017) がこの現象を1つの章として取り扱っている。「が／の」交替の現象は具体的には次のような表現である。（本稿では、読みやすさの観点から、ローマ字で書かれた例文もすべて一般的な日本語表記で引用する。どの部分をどのような漢字で記すかなどは本稿著者によるものである。また議論に関連する部分に下線を施すことにする。）

(1) a. ぼくが読んだ本 (Harada 1971 (1a))

b. ぼくの読んだ本 (Harada 1971 (1b))

これらの場合、使われる格助詞は「が」でも「の」でもよい。だが、次の例が示すように、どのような場合でも許される訳ではない。

(2) a. その本はぼくが読んだ。

b. \*その本はぼくの読んだ。

したがって、どのような場合に「が／の」交替が許され、どのような場合に許されないかを言語理論は説明する必要がある。実際、その背後にある原理として、さまざまな提案がなされている。理論の詳細については省くが、上記 Maki & Uchibori (2008), Ochi (2017) の他に南部 (2014) や Saruwatari (2016) なども参照されたい。なお、この現象は「交替」という名称で知られているが、その分析のために例えば (1a, b) のどちらかを基本形とし、もう一方をその派生形として導かなければならないという必然性はない。本稿は専ら、「の」がどのような環境にあらわれるかに関心を置くものである。

### 1.2 「が／の」交替が起こる環境

日本語を時代区分する場合、いくつかの説があるが、ここでは便宜的に近代日本語 (1868-1945) と現代日本語 (1945 以降) に分けることにする (加藤ら (編) 1989: 282-283 を参

## 近代文学作品における「が／の」交替

考)。したがって、近代文学作品を見ることは近代日本語を見ることであり、(現在では使われない表現が多く見つかることから)現代日本語とは異なった言語であると考えられることになる。本稿の目的のひとつは、現代日本語の使用者が通常であれば容認しないであろう表現が近代日本語にさまざまな形で見られることを示すことにある。とりわけ、現代日本語に関する言語理論における主張からは予測されないような表現を見る。その目的はそうした主張が誤りであることを示すことではなく、そうした近代日本語における表現を生み出す仕組み(文法)が現代日本語のそれとは異なることを示すことにある。同時に、「が／の」交替に関する議論の中で、言語表現にかかわる容認度の差があり、それが議論を複雑なものにしているということがあがるが、少し前の日本語の実態を確認することにより、現代日本語における「が／の」交替の認識が改まる可能性もあり、近代日本語を細かく見ることが重要であることも本稿は指摘したい。

「が／の」交替は「ほくの読んだ本」のように、主節ではない環境で起こると考えられている。この例では「ほくの読んだ」という節が「本」という名詞に先行している。主節ならば、(2)で見たように、「ほくの」は容認されず「ほくが」だけが許される。(主節においても「の」格が許容される九州の肥築方言などがあるが、本稿の対象からは外す。)[「が／の」が接続する名詞は一般に主語と言えるので、「が・の」は主格マーカーと言える。ただし、厳密には「が」でマークされる状態をあらわす述語の目的語にも「が／の」交替は見られる。

- (3) a. ウナギ {が／の} 食べたい人 (Harada 1971 (4))  
b. お菓子 {が／の} 好きな女の子 (Harada 1971 (6))  
c. 太郎 {が／の} 英語 {が／の} わかること (Ochi 2017 (6))

そうした例を踏まえた上で、本稿では「が／の」交替に関して、以下「主語、主格」という用語を用いて見ていくこととする。

格助詞「の」は(名詞が)名詞と結びつく際にあらわれることもあり(「カナダの地図」「カナダ(\*の)から」)、主格マーカー「の」の出現の分析範囲を名詞句とする分析がある(Miyagawa 1993, Ochi 2001 など)。一方、節のあとに後続する要素が名詞ではない場合にも「が／の」交替が起こることが指摘されており、節の属性を重視した分析も提起されている(Watanabe 1996, Hiraiwa 2005 など)。次節以降、これらの議論で使用されている用例、あるいは議論の反証となる用例などを近代日本語から示すこととする。繰り返すが、その目的は、個々の分析に反駁するのではなく、約100年ほど前の日本語が現在の日本語といかに異なるかを示すことにある。

本稿の構成は次の通りである。2節では節のあとにどのような要素が来るかという観点から近代日本語の「が／の」交替現象を見る。具体的には、主語が「の」でマークされている用例を挙げる。3節では現代日本語の「が／の」交替について提起されている主張に対する反例が近代日本語に見られることを示す。4節ではそうした近代日本語の用例を参考にしな

がら、現代日本語の「が／の」交替をどのように分析するのが適切であるかを議論する。

## 2. 節を受けるホストの観点からの分類

「ぼくの読んだ本」に埋め込まれている節「ぼくの読んだ」は名詞「本」が受けている。そうした受け手を仮に「ホスト」と呼んだ場合、ホストが名詞でなくても「が／の」交替が起こる場合があることが指摘されている。

- (4) a. ジョンは [メアリーの読んだより] たくさんの本を読んだ。(Watanabe 1996 (45a))  
 b. ジョンは [メアリーの働いたより] 一所懸命働いた。(Watanabe 1996 (45b))
- (5) a. ジョンは [雨の止むまで] オフィスにいた。(Hiraiwa 2005 (3.30b))  
 b. [ぼくの思うに] ジョンはメアリーが好きに違いない。(Hiraiwa 2005 (3.31b))  
 c. [先月一回電話のあったきり] ジョンから何も連絡がない。(Hiraiwa 2005 (3.32b))  
 d. この辺りは [日の暮れるにつれ (て)] 冷え込んでくる。(Hiraiwa 2005 (3.33b))  
 e. ジョンは [時の経つとともに] メアリーのことを忘れて行った。  
 (Hiraiwa 2005 (3.34b))  
 f. [ジョンの来ると来ないと] では大違いだ。(Hiraiwa 2005 (3.35b))  
 g. [ジョンの叱られたの] はメアリーにだ。(Hiraiwa 2005 (3.39b))  
 h. ジョン [皿の上にリンゴの置いてあったの] を勝手に食べた。  
 (Hiraiwa 2005 (3.40b))

節が接続している語が名詞であるか否かは、その語に「この、その」といった表現がつくかどうかで判断できる（「その本／\*それ本」「\*そのから／それから」）。上記の場合、「その」がつかないことから名詞ではないことがわかる。

- (6) a. {\*その／それ} より  
 b. {\*その／それ} まで  
 c. {\*その／それ} に  
 d. {\*その／それ} きり  
 e. {\*その／それ} と (Hiraiwa 2005 (3.38))

「が／の」交替における節のホストが必ずしも名詞でないことから、節の範囲で交替を説明する主張に繋がる。

以下、近代文学作品を中心に、近代日本語でどのような表現が存在するか見ていく。そして、近代日本語の主格マーカー「の」がどのような環境で許されるかを観察する。本稿で示す用例は、基本的に「の」を「が」で置き換えることができると思うが、提示する用例のいくつかは現代日本語の観点から不自然と感じられるものもあるだろう。以下の用例にはそれぞれ作者の誕生年を西暦で記す。引用元として「青空文庫」(<https://www.aozora.gr.jp/>)

近代文学作品における「が／の」交替

を基本的に利用した。用例採集には「日本語用例検索」(<http://www.let.osaka-u.ac.jp/~tanomura/kwic/aozora/>), 「Aozora Bunko: 青空文庫検索」(<https://www.joao-roiz.jp/AOZORA/DB>), 「用例.JP」(<http://yourei.jp/>) などを利用させていただいた。興味深い表現についてはなるべく多く載せることにする。

## 2.1 名詞ホスト：ため、まま、はず、よう、の

まず、ホストに注目して近代文学作品から用例を示す。本稿の最初に例を挙げたように、「が／の」交替の典型的な型はホストが名詞であると考えられる。この小節では、ホストが名詞であるが、全体では従属節として副詞的に機能している用例を中心にみることにする。ホストが名詞であるか否かは、先に見たように、そのホストに「その・この」が接続可能かということで区別できる。

### 2.1.1 「ため」

次はホストが名詞「ため」の用例である。「～ためだ」と文末でも「の」があらわれる。

(7) a. 何でも喉の渴いたため、炭酸水か何か飲みにはひつたのである。

芥川龍之介 1892 生「谷崎潤一郎氏」

b. 自分は兄の間の余りに厳格なため、ついこう簡単に答えてしまった。

夏目漱石 1867 生「行人」

c. あまりに精神の肌質のこまかいため、現実から追い捲くられたりした生きものであって、死ぬには、まだ生命力があり過ぎる。

岡本かの子 1889 生「金魚療乱」

d. 前からあった胃病が、船の中で食物と気候との変わったために、だんだん嵩じて来て起きられなくなった

有島武郎 1878 生「或る女 1 (前編)」

e. 「ははあ、あんまり水のはけないためだ。」

宮沢賢治 1896 生「植物医師 郷土喜劇」

f. 私のしたことは私の知恵の足らないためです。

倉田百三 1891 生「愛と認識との出発」

### 2.1.2 「まま」

(8) a. それはそれは美しい、余所の婦人が、気軽な腰元の勧めるまま、徒然の慰みに、あの宰八を内証で呼んで、

泉鏡花 1873 生「草迷宮」

b. 午後もまたホテルに閉じこもり、仕事にもまだ手のつかないまま、結局、ソフォクレエスの悲劇を再びとりあげて、ずっと読んでしまった。

堀辰雄 1904 生「大和路・信濃路」

「…の～がままに」という形もある。

(9) a. 汽車の進むがままに、私たちは窓から視た。

泉鏡花 1873 生「唄立山心中一曲」

- b. 当時は恋愛至上主義の行われていた世で、女は愛情の命ずるがままに行動して、それで自から欺かぬ、よい事と許されていた情弱時代であったから、

幸田露伴 1867 生「連環記」

### 2.1.3 「はず」

- (10) a. こんな事あるはずだったのをどうしてまた忘れていたものだろう。

有島武郎 1878 生「或る女 1 (前編)」

- b. そんな莫迦ばかげたことあるはずはない。

芥川龍之介 1892 生「馬の脚」

### 2.1.4 「よう」

- (11) a. 軽い重しをして、水からワラビの出ないように気をつける。

高村光太郎 1833 生「山の春」

- b. 博士は、まず塔の壁を修理し、雨のはいらぬようにした。

海野十三 1897 生「超人間 X 号」

- c. 目の覚めるようだと申しましても派手ではありません。

泉鏡花 1873 生「眉かくしの霊」

### 2.1.5 準体助詞「の」

節に「の」が加わると、全体が名詞的になり、節が主語や目的語として機能できる。「の」の挿入は、「～する (の) に従って」「～する (の) に違いない」などに見られる現在進行中のプロセスでもある (金水ら 2011: 111)。

- (12) a. やがて列車が入って来て、加世子たちの乗りこむのが見え、乗りこんでからも、窓から顔を出して軽く手を振った。

徳田秋声 1871 生「縮図」

- b. かの女の足音の階子段の下へ消えて行くのを聞きながら搔卷のかげで密にかれはこういった。

久保田万太郎 1889 生「春泥」

- c. 夕方、溪ぎわへ出ていた人があたりの暗くなったのに驚いてその門へ引返して来ようとするとき、

梶井基次郎 1901 生「温泉」

- d. お庄は伯母と従姉あねが、着るものを着ないでも、膳の上のうまいものの絶えたことのないのを知っていた。

徳田秋声 1871 生「足迹」

「節+の」は主語や目的語といった項ではない環境にもあらわれる。

- (13) a. 『自然には終りが無い』、終りが無いのは到達点のないのである。

岩野泡鳴 1873 生「神秘的半獣主義」

- b. コオトの上の空間は絶えず何かを破裂させる。同時にネットの右や左へ薄白い直線を迸らせる。あれは球の飛ぶのではない。目に見えぬ三鞭酒を抜いているのである。

芥川龍之介 1892 生「保吉の手帳から」

c. 或時はやや病が衰えて元気が回復したかのように、透徹するような瘦れた顔に薄紅の色がさして、それは実に驚くほどの美しさが現われることも有ったが、それは却って病気の進むのであった。 幸田露伴 1867 生「連環記」

d. かように節儉しなければならぬ境遇にある宗助が、小六のために尽さないのは、尽さないのではない、頭に尽す余裕のないのだとは、小六から見ると、どうしても受取れなかった。 夏目漱石 1867 生「門」

e. もうこうなったら仕方がねえ、これもまあ為さんの運の悪いのだと諦めて、おれもそのまま帰って来たが、 岡本綺堂 1872 生「半七捕物帳 44 むらさき鯉」

f. 札をひらく。當つたためしのないのだが、それでもいつかはびつたり當るだらう、と彼等は考へる。 太宰治 1909 生「道化の華」

g. 意志と知識との間には絶対的区別のあるのではなく、 西田幾多郎 1870 生「善の研究」

h. それで最後に残つたすかんぼの話へと急ぐ。別にこれと云ふほどの事の有るのではなく、唯幾十年ぶりにそれを食べて見て、 木下空太郎 1885 生「すかんぼ」

i. 人間の悲鳴だか動物のほえるのだかわからないような気味の悪い叫び声が 寺田寅彦 1878 生「ねずみと猫」

j. 新古今の撰定を見れば少しは訳の分つて居るのかと思へば 正岡子規 1867 生「再び歌よみに与ふる書」

k. あんまり内をあけてはというので、姉上の止めるのにかかわらず帰る事になった。 寺田寅彦 1878 生「竜舌蘭」

次の用例では「ので」がまとまって原因・理由をあらわしているように感じられる。

(14) a. ある日、正ちゃんは、学校のないので、午前十一時ごろにやって来た。 岩野泡鳴 1873 生「耽溺」

b. 自分も即答はしかねたが、加藤男爵の事についてかねていくらか考えてみた事のあるので、 国木田独歩 1871 生「号外」

c. その庭の片端の僕の方に寄つてるところは、勝手口のあるので、他の方から低い竹垣をもって仕切られていて、 岩野泡鳴 1873 生「耽溺」

d. また浮御堂の立つてゐるので知られてゐる名勝區である。 近松秋江 1876 生「湖光鳥影 琵琶湖めぐり」

e. 饗庭野の陸軍演習地のあるので賑はうてゐる今津の町は、 近松秋江 1876 年生「湖光鳥影 琵琶湖めぐり」

f. 細君は主人が斜ならず機嫌のよいので自分も同じく胸が闊々とするのもあろうか、 幸田露伴 1867 生「太郎坊」

- g. 「誠に因縁の悪いので、親の菩提の為、私が丹精して遣るから、仇を討つなぞということは思わぬが宜い、私の弟子になって、母親や兄さんの為に追善供養を吊うが宜い」  
三遊亭円朝 1839 生「真景累ヶ淵」
- h. これは聞き様の悪いので、母親は其の心持ではない、  
三遊亭円朝 1839 生「業平文治漂流奇談」
- i. 運の悪いので、する事なす事損ばかり、三遊亭円朝 1839 生「敵討札所の靈験」
- j. くべた焚木は燃えていても、風通しのいいので、暑さはおほえさせなかった。  
岩野泡鳴 1873 生「耽溺」
- k. 今年九歳になる、校内第一の綺麗な少年、宮浜浪吉とって、名まで優しい。色の白い、髪の美しいので、源助はじめ、嬢ちゃん坊ちゃん、と呼ぶのであろう  
泉鏡花 1873 生「朱日記」
- l. 短い月日の間に、秩祿を加へられる度数の多いので、心あるものは主家のため、  
森鷗外 1862 生「栗山大膳」
- m. 他の二人ともに気乗りのしないので、  
中里介山 1885 生「大菩薩峠 29 年魚市の巻」
- n. 「直木の奴、諷吐いてやがる」と云ったりした人のあるので、明らかであるが、  
直木三十五 1891 生「死までを語る」
- o. 加藤男爵の事についてかねていくらか考えてみた事のあるので、  
国木田独歩 1871 生「号外」
- p. 彼女は試験委員の一人であった島村氏の前へはじめて立ったおり、島村氏はじめ他の委員も彼女の強壯なと、音声の力強いと、体軀の立派なに合格としたが、英語の素養のないで退学させられるということになった。  
長谷川時雨 1879 生「松井須磨子」
- q. この山は古來佛法僧の棲むので名高い山である。  
若山牧水 1885 生「樹木とその葉 21 若葉の山に啼く鳥」
- r. 未だ曾てこの動物に向って絶望を投げつけたことのないのでわかります。  
中里介山 1885 生「大菩薩峠 33 不破の関の巻」
- 「…のないでもない」という型は「…のない」と「の」を落としてもよい。
- (15) a. 実を白状すれば、来た初めには多少の懸念のないでもなかった。  
大杉栄 1885 生「獄中消息」
- b. 今頃丑さんが女と寝てゐるかと、嫉いて見た事のないでもない。  
石川啄木 1886 生「天鷲絨」
- c. 多少調子の違つた處のないでもないが、石川啄木 1886 生「雲は天才である」
- d. 考へれば諒とすべき點のないでもない。石川啄木 1886 生「雲は天才である」

近代文学作品における「が／の」交替

- e. たゞ之れ丈けならば、必ずしも世に類のないでもない、實際自分も少からず遭遇した事もある。 石川啄木 1886 生「雲は天才である」
- f. 何か恥しいことを思い出した時だろう？」満更経験のないでもない豹一がそう言う  
と、 織田作之助 1913 生「青春の逆説」
- g. 奥さんは二、三そういう話のないでもないような事を、明らかに私に告げました。  
夏目漱石 1867 生「ころろ」

上の例では準体助詞「の」がない場合でも、主格マーカー「の」が許される。そうした環境はどのように定義されるだろうか。決定的なホストを特定できなければ、ホストがないと考えるべき環境である。

「のに」とままとると逆説的な接続助詞になるが、この環境も主格マーカー「の」を許す。

- (16) a. 古藤はなんとも答えず、雨の降り出したのに傘も借りずに出て行った。  
有島武郎 1878 生「或る女 2 (後編)」
- b. しかし、火鉢に火のあるのに、ひどくそこは寒かった。  
横光利一 1898 生「比叡」
- c. 「まあ、曾呂利さん。足のわるいのに、ひとりで出かけたりするから、  
海野十三 1897 生「爆薬の花籠」
- d. 通りの賑やかなのに、ここは広々した境内がシンとして、遠い木隠れに金燈籠の光がぼんやり光っていた。  
徳田秋声 1871 生「黴」
- いわゆる分裂文にも準体助詞「の」があらわれ、主格マーカー「の」が許される。
- (17) a. 近所の子供の中で、遊んで氣の置けないのは、問屋の三郎さんに、お隣りのお勇さんでした。  
島崎藤村 1872 生「ふるさと」
- b. ただ罪の深いのは少将じゃ。 芥川龍之介 1892 生「俊寛」
- c. 段々大きくなって来ると女の児のすきなのはナワ飛びです。  
宮本百合子 1899 生「ソヴェト映画物語」

参考までに、準体助詞「の」のあとに主格マーカー「の」がつく用例を示す。

- (18) a. 前の方は少し背が高い。前の背の高いのわかるのは、後ろのが、それよりやや劣るからである。  
中里介山 1885 生「大菩薩峠 40 山科の巻」
- b. けれども二人がこっちに来るのおそいことおそいこと。  
有島武郎 1878 生「溺れかけた兄妹」
- c. 美しいものの好きな母は、 小金井喜美子 1871 生「鷗外の思い出」
- 本小節では準体助詞「の」を取り上げ、さらに「のだ」「ので」「のに」なども同種と考えた。そして、その分布が主語や目的語に限られないことを見た。



### 2.1.6 まとめ

本小節では、ホストが名詞である場合を見た。「ため、はず、の」など、抽象的な意味をもつ名詞が節中のさまざまな位置にあらわれることを見た。

## 2.2 ホストが名詞でない用例：まで、から、より、ばかり、だけ、他

ホストが名詞でない場合を見てみよう。

### 2.2.1 「まで」

節を従えて時間関係を表す「まで」は、「それまで」は自然だが「\*そのまで」が不自然であることから名詞ではない。

(19) a. ある科学者はかくのごとき場合にあまりはなはだしく興奮してしばらく心の沈静するまでは筆を取る事さえできなかったという話である。

寺田寅彦 1878 生「科学者と芸術家」

b. 私は運動場の入口に近いところで、始業の鐘のなるまで、皆がわあわあ云いながら追っかけごっこをしたり、環になって遊んでいるのを、ただもう上気したようになって見ていた。

堀辰雄 1904 生「幼年時代」

c. 右手をとらへて後手にねぢあげやうとしたのであるが、お綱は男の手首に血の滲むまで噛みついて執られた腕をふりはなし、男の胃袋をめがけて激しいそして敏活な一撃の頭突きをくらはせた。

坂口安吾 1906 生「禅僧」

d. 梯子をかけなければ、手の届きかねるまで高く積み重ねた書物がある。

夏目漱石 1867 生「三四郎」

なお、「節+まで」を「節+ときまで」と同等に考える可能性もあるが、それが妥当ではないという議論は Ochi (2017) を参照のこと。

### 2.2.2 「から」

時間を表す「から」節内に主格マーカー「の」が見られる。

(20) a. 戦争の始まってから、互いにかわった新聞を一つずつ取って交換して見ようという約束ができた。

田山花袋 1872 生「田舎教師」

b. そして、町の婦人達の来てから帰ったまでのことを、細大洩さず話しては、

宮本百合子 1899 生「貧しき人々の群」

c. この主人がどういう考になったものか吾輩の住み込んでから一月ばかり後のある月の月給日に、大きな包みを提げてあわただしく帰って来た。

夏目漱石 1867 生「吾輩は猫である」

d. 甘い香気のする柿の花の咲くから、青い蒂の附いた空な実が落ちるまで、少年の時

の遊び場所であった土蔵の前あたりの過去の日の光景はまだ彼の眼にあった。

島崎藤村 1872 生「新生」

原因・理由を表す「から」節内にも主格マーカー「の」が見られる。

- (21) a. 手をひつぱれば抜けるのは、藁人形の手の、さしこんであつたからだ。

折口信夫 1887 生「雪の島」

- b. 是れと申すも手前共の悪るかつたからで、聊か兼吉を怨む筋は無いと悔いて居りまするが、

木下尚江 1869 生「火の柱」

- c. ここに寺のあるからは、矢代の父祖たち滅亡のさい、城とともにいのちを捨てた者ら最後の場所かとも想像された。

横光利一 1898 生「旅愁」

Miyagawa (2017) は理由節、条件節などでは「が／の」交替は起こらないことを以下の例を用いて示すが、近代日本語ではそうした表現が見られることがわかる。

- (22) a. 花子 {が／\*の} 来るから、うちにいてください。 (Miyagawa 2017: 158)

- b. 雨 {が／\*の} 降ったから、道が濡れている。 (Miyagawa 2017: 158)

ついでに、近代文学作品から理由・仮定の表現を挙げておく。理由をあらわす「～ので」節内に「の」があらわれる (2.1.5 節にも同様の用例あり)。

- (23) a. 然ればこそ隅田川上下の流れを横切って十四の箇所を徂徠している数々の渡し船も、それぞれに乗る人の絶えないので船夫の腮も干あがらぬのである。

柴田流星 1879 生「残されたる江戸」

- b. 澹台子羽は容貌の揚らないので孔子様にさへ軽く視られましたが、徳を修め道に進んだので、後に至つて孔子様も吾が失敗であつたと歎ぜられたとあります。

幸田露伴 1867 生「運命は切り開くもの」

仮定の表現にも主格マーカー「の」があらわれる。

- (24) a. その様な婦人のあるならば、始めより私を迎へぬがよし、

清水紫琴 1868 生「こわれ指環」

- b. 紺屋の物干す料なる広く明きたる地のあれば、そこをさして我先にと往くなり。

森鷗外 1862 生「伊沢蘭軒」

### 2.2.3 「より」

比較の「より」を見ておこう。

- (25) a. 聞くともなく耳を傾けてみるとまた例の鳥の啼くのが聞えて来た。山鳩の啼くよりは大きく、梟よりは更に寂び、初めもなく終りもないその聲に耳を澄ましてみると、

若山牧水 1885 生「比叡山」

- b. そうして虫の這うよりもモット、ユックリと……殆んど止まっているか、動いているかわからない位の速度で、唇の下の方へ匍い降りて行く。

夢野久作 1889 生「斜坑」

節と「より」の間に準体助詞「の」が置かれることもある。

(26) a. 己は、渠等の検べるのより、お前がそこらをまごつく方がどのくらい迷惑か知れんのだ。  
泉鏡花 1873 生「婦系図」

b. 布袋さまみたいな貴様が泣くと、禪のないのよりも、もっとみっともないぞ

海野十三 1897 生「浮かぶ飛行島」

なお、「節+より」を「節+量より」と同様に扱うべきかどうかについては Ochi (2017) を参照のこと。

#### 2.2.4 「ばかり」

(27) a. 私たちは、私たちの背後の、いましがた其処から私たちがの出てきたばかりの林の中から、数人のものが懐中電気を照らしながら、出てくるのには全然気がつかずにいた。  
堀辰雄 1904 生「美しい村」

b. 日の経つに従ごうて僕は僕の身の上に一大秘密のあることを益々信ずるようになり、父母の挙動に気をつければつけるほど疑惑の増すばかりなのです。

国木田独歩 1871 生「運命論者」

c. ただ広びろとつづいた渚に浪の倒れているばかりだった。

芥川龍之介 1892 生「海のほとり」

#### 2.2.5 「だけ」

(28) a. 共同の幸福を願ふ人々の行く様と見るのが、時代の古いだけに、適当な様に思はれる。  
折口信夫 1887 生「幣束から旗さし物へ」

b. 平生、口数の少いだけに、こうなるとその切々とした述懐に、力が籠もって来るのである。  
菊池寛 1888 生「貞操問答」

c. 委しいことの分らないだけ、東京の家の方が気遣わしくもある。

島崎藤村 1872 生「家（上巻）」

d. あと弾丸は五発ありますから、弾丸のあるだけ撃ってみましょう」

海野十三 1897 生「幽霊船の秘密」

e. どうせ、腕力と心臓の強いだけが取柄の男さ、  
山本勝治 1904 生「十姉妹」

f. あとはみんな女ばかりだから、バカにしていたのしただけをして、日を送った。  
中里介山 1885 生「大菩薩峠 39 京の夢おう坂の夢の巻」

g. 自分の知っているだけの文献を数えてみても、これだけあるのだから、私などの知らない他の方面の学科に関するものをあげたら、ずいぶん分量になるかもしれない。  
寺田寅彦 1878 生「池」

- h. そして妙に焦ったようなところの見えないだけは気持がいい。

寺田寅彦 1878 生「二科会展覧会雑感」

- i. そこには幸ひ僕の外に二三人の客のあるだけだつた。

芥川龍之介 1892 生「歯車」

### 2.2.6 「きり」

- (29) a. が、あんまり淋しいところだし、不便なことも不便なので、二三人人のはいったき  
りで、そのまま使われずにいる別荘も少なくはないらしかった。

堀辰雄 1904 生「楡の家」

- b. 小さなランプのついてるきりの、うす暗い中から、二三人の男が起きあがりました。

豊島与志雄 1890 生「金の目銀の目」

### 2.2.7 「ほど」

「ほど」は「そのほど」よりも「それほど」のほうが自然なので名詞ではないと考える。

- (30) a. 仏天青という名前は、私たちも、耳にたこの出来るほど聞いていますよ。

海野十三 1897 生「英本土上陸作戦の前夜」

- b. 初めから終いまで一度も口を利いたこともないので、座敷のうちは気味の悪いほど  
にしんとしているんです。

岡本綺堂 1872 生「半七捕物帳 09 春の雪解」

- c. そうしていると、秋ながら、汗の出てくるほどの好い天気だった。

堀辰雄 1904 生「三つの挿話」

### 2.2.8 「くらい」

「くらい」は「それくらい」も「そのくらい」も共に許容されるが、ここに記す。

- (31) a. ホモイはいきなりその枝に、青い皮の見えるくらい深くかみつきました。

宮沢賢治 1896 生「貝の火」

- b. 観客の眼中にほかのものはいっさい入り込む余地のないくらい強烈な刺激を与える。

夏目漱石 1867 生「三四郎」

- c. 米として見た処で鳥の餌の少し上等な位にしか精げられないだらうと思はれる。

平出修 1878 生「夜鳥」

- d. 「手続きの面倒なくらいはいいですよ。

海野十三 1897 生「海底都市」

- e. 実は、さきに小春を連れて、この旅館へ帰った頃に、廊下を歩行き馴れたこの女が、  
手を取ったほど早や暗くて、座敷も辛じて黑白の分るくらいであった。

泉鏡花 1873 生「みさごの鮎」

### 2.2.9 「べし」

「べし」は助動詞だが、主語が「の」でマークされることを許容するようだ。

- (32) a. 聞くところによると水府は今非常な混乱に陥っている、これは国家危急の秋で武士の坐視すべきでない、よって今からここを退去する、

島崎藤村 1872 生「夜明け前 02 第一部下」

- b. かやうの事は今の人の嫌ふべきを、昔は嫌はずと見えたり。

芥川龍之介 1892 生「芭蕉雑記」

- c. 涙しなくばと云ひけんから衣胸のあたりの燃ゆべく覚えて夜はすがらに眠られず

樋口一葉 1872 生「闇桜」

- d. わが家も徳川家瓦解の後は多からぬ扶持さへ失ひければ、朝あさのけむりの立つべくもあらず、

芥川龍之介 1892 生「臘梅」

「～べき」は連体形であり、それ自体が体言に相当することもあるから不思議ではないかもしれない。しかし、「～べく」においても「の」で主語をマークすることが許されている。

### 2.2.10 「そうに」

助動詞「そうだ」が「～そうに」と活用し、副詞的に用いられる。その節の中に主格マーカー「の」があらわれる。

- (33) a. いきなりぺこりと腰を曲げると、ごく屈託のなさそうにあいさつをいたしました。

佐々木味津三 1896 生「右門捕物帖 07 村正騒動」

- b. 答えた田口は何だか意味のありそうに微笑した。

夏目漱石「彼岸過迄」

- c. お銀は引越の日に、いろいろのものの取り出された押入れの前にベッパリ坐って、思いの深そうに言い出した。

徳田秋声 1871 生「黴」

- d. むむ、見える、恥しそうに見える、極きまりの悪そうに見える、がやっぱり嬉しそうに見える、

泉鏡花 1873 生「天守物語」

- e. 繁は皆の見ての前で父に逢うことをきまりの悪そうにして、少年らしく膝を掻合せていた。

島崎藤村 1872 生「新生」

- f. 逢って見て意気の合いそうにも無ければ、断らねば成らない。

島崎藤村 1872 生「新生」

- g. 逢いさえすれば、路費の出来そうに言っていた父親の家への同行を、お島は二度も三度も迫ってみたが、小野田は不快な顔をして、いつもそれを拒んだ。

徳田秋声 1871 生「あらくれ」

- h. 嘘八百万両も貸付けたら小人島の政治界なんぞには今でも頭の出せそうに思われる理屈がある。

幸田露伴 1867 生「蒲生氏郷」

- i. 見てもうまそうに、香しく、脂の垂れそうなので、

泉鏡花 1873 生「眉かくしの霊」

最後の用例は「そうに」ではなく「そうな」という形である。

### 2.2.11 まとめ

ホストが名詞でないと考えられる用例を見た。「から」などについては現代日本語では容認されないと思われる。また、節が従属的でない述部として機能することもあった。

### 2.3 連語：につれて、に従って、とともに、にまかせ、(思う)には、そうに

この小節では複数の要素がまとまり、節のホストとなっていると考えられる用例を見る。

#### 2.3.1 「につれて」

- (34) a. 同じ晝ながら時のすゝむにつれて明るみの増すやうに、同じ夜ながら更の闌けるにつれて闇は深まつて行く。 有島武郎 1878 生「潮霧」
- b. 天井の両側に行儀よく並んでいる吊皮が、電車の動揺するのにつれて、皆振子のよ  
うに揺れていますが、 芥川龍之介 1892 生「妖婆」
- c. それはいつからとも、わかりませんが、月日の経つのにつれて、アヤ子の肉体が、  
奇蹟のように美しく、麗沢に長つて行くのが、 夢野久作 1889 生「瓶詰地獄」
- 「の」が「～につれて」の前に挿入されることもある。

#### 2.3.2 「に従って」

- (35) a. 夜の更るに従って浪はます―烈しく、ざぶり―と舟の中に汐水が入りますのみ  
か、 三遊亭円朝 1839 生「後の業平文治」
- b. 自己の経験する世界の拡大するに従って常識は動揺させられる。  
三木清 1897 生「哲学入門」
- c. これは、言語の違うに随って異なると共に、同じ言語にあっても、時代または時期  
の違うに従って変遷するものである。 橋本進吉 1882 生「国語音韻の変遷」
- d. 「罰の重い軽いに従って、冷凍時間に長い短いがあります。  
海野十三 1897 生「海底都市」
- e. そればかりか、ふと気がつくと、灯の暗くなるのに従って、切り燈台の向うの空気  
が―所だけ濃くなって、 芥川龍之介 1892 生「道祖問答」
- 最後の用例には「の」が挿入されている。

#### 2.3.3 「とともに」

- (36) a. 葉藏は夜のふけるとともに、むつつりして來た。 太宰治 1909 生「道化の華」

- b. かの烈々たる怨念の跡無く消ゆるとともに, 尾崎紅葉 1868 生「金色夜叉」
- c. 廂間の下水口より噴出づる湯気は一団の白き雲を舞立てて, 心地悪き微温の四方に溢るとともに, 垢臭き悪気の盛に迸るに遭へる綱引の車あり。  
尾崎紅葉 1868 生「金色夜叉」
- d. 横浜! 横浜! と或は急に, 或は緩く叫ぶ声の窓の外を飛過るとともに,  
尾崎紅葉 1868 生「金色夜叉」
- e. そのお歌の終わるとともに, この世をお去りになりました。  
鈴木三重吉 1882 生「古事記物語」

最後の用例には「の」が挿入されている。

### 2.3.4 「にまかせ」

- (37) a. 軍船の底に穴をあけてそこから海水の入るにまかせ, 沈めてしまえばいいのだ  
海野十三 1897 生「軍用鮫」
- b. 「ただ金のあるにまかせて, 色男ぶって, 芸者を泣かせて, やにさがっていたのではない!」  
太宰治 1909 生「親友交歓」
- c. 彼らは, 夜の入港のように, 陸の醜悪な事実を一切闇のおおうにまかせて, その明るい, 港の魅惑的な燈火にあこがれてしまうのであった。  
葉山嘉樹 1894 生「海に生きる人々」
- d. 売っても値にならないために詮方なく鼠のかじるのにまかせればなしのわずかばかりのおれの蔵書を, てあたりしだいにひんめくった挙句  
西尾正 1907 生「放浪作家の冒険」
- e. その原には, 古池があつて, まわりに枯草が生い茂り, あぶなつかしいブランコが, 子供の乗るのにまかせてあつた。  
岸田国土 1890 生「時処人」
- 「の」が挿入されることもある。

### 2.3.5 「(思う) には」

動詞の基本形(終止形・連体形)のあとに「に」を加えると, 節中に主格マーカー「の」が許される環境となる。

- (38) a. わたくしの思ふには, 縦令茶山が朴齋を傲慢なりとなしたとしても, 此言は必ずしも朴齋を傷くるものでは無い。  
森鷗外 1862 生「伊沢蘭軒」
- b. その先輩の言うには, 日本へ行って最も困るのは足袋だ,  
太宰治 1909 生「惜別」
- c. 私の思うのには, 村右衛門が河原物といわれた役者の階級打破に先鞭を附けたものです。  
淡島寒月 1859 生「江戸か東京か」

近代文学作品における「が／の」交替

d. その娘の言うのには、現の中ながらどうかして病が復したいと、かねて信心をする  
湯島の天神様へ日参をした、泉鏡花 1873 生「湯女の魂」  
最後の2つは「の」が挿入されている。

### 2.3.6 慣用的な表現：～と～ないと他

一部が固定化されている表現を見る。

- (39) a. 何となくその根のつくと、つかないとが、これから先の二人の生命いのちに関係でもあるかのように思われて成らなかった。島崎藤村 1872 生「新生」
- b. 出版の時機が小説の売れると売れないとに大関係がある。  
平林初之輔 1892 生「商品としての近代小説」
- c. その恋の成るとならぬとは、私事ではきまらぬものじゃ。  
倉田百三 1891 生「出家とその弟子」
- d. 特に軽快な引き球などのできるとできないは主としてこの手首の自由さに係わるように思われるのである。寺田寅彦 1878 生「『手首』の問題」
- e. 暗くてどこに何が居るか判然と分らないが、人気のあるとないとは様子でも知れる。  
夏目漱石 1867 生「坊っちゃん」

用言の組み合わせが肯定・否定でない場合もある。

- (40) a. 国の興と亡ぶるとはこのときに定まるのであります。  
内村鑑三 1861 生「デンマーク国の話」
- b. 「いや、風流には、夜の早いと遅いとはござらぬでな、  
中里介山 1885 生「大菩薩峠 33 不破の関の巻」
- c. 私は御婦人に惚れます。私の惚れるとは犬馬の労をつくし、尊敬の限りをつくすことで、私は下僕となる喜びによってわが恋をみたすタテマなんです。  
坂口安吾 1906 生「ジロリの女」
- d. 然れども生産力の乏しきと国庫の空なるとは、世評の最も唱うる処たり。  
関寛 1830 生「関牧場創業記事」

最後の用例では連体形「乏しき」に「生産力の」が先行している。連体形はそれ自体が体言(=名詞)として機能することもあるから、この「の」は純粹に主格ではないとの分析も可能かもしれない。

「の」が節のあとに挿入されることもある。

- (41) a. 彼は今廿四歳の青年である。暫く奉公をして年季の明けたのは廿二の暮であつた。それからは年の若いと運が向かないとで家へ歸つた儘そこゝと彷徨つて別に目に立つことも無くて過ぎた。長塚節 1879 生「商機」
- b. あの、何の、あるのと、ないのと、なんです。泉鏡花 1873 生「錦染滝白糸」



c. 趣味のないと見込のないとは別物である。 夏目漱石 1867 生「虞美人草」

d. 壱州の民は、わりの班田を受ける事の出来るのと出来ないのとの二種の群居に分れてゐた。 折口信夫 1887 生「雪の島」

e. 私は空気のいいとお客のないとが何よりで、

宮本百合子 1899 生「獄中への手紙 07 一九四〇年（昭和十五年）」

f. ところが、同じ眼の見えないに致しましても、そのお方の眼の見えないと、私の見えないとは性質たちが違うんでございますね。

中里介山 1885 生「大菩薩峠 19 小名路の巻」

g. 鮒や鯉やたなごなどのたくさんいるのといないのとがある。

田山花袋 1872 生「田舎教師」

h. 八橋は明けて十九になろうという若い遊女で、しもぶくれのまる顔で、眼の少し細いのと歯並びの余りよくないのとを疵にして、 岡本綺堂 1872 生「籠釣瓶」

基本的には上に示した用例と同様だが、「かかわらず」という表現がついたものがいくつかある。

(42) a. お角さんのイヤがるとイヤがらないとに拘らず、

中里介山 1885 生「大菩薩峠 32 弁信の巻」

b. 人類の好くと好かないとにかかわらず、現にモロー彗星は、刻々地球に追っているのだ。 海野十三 1897 生「火星兵团」

c. 当人の知ると知らぬににかかわらず、

中里介山 1885 生「大菩薩峠 26 めいろの巻」

d. 恋する人は、理の許す許さぬににかかわらず、物のあるなしにかかわらず恋をする。

伊藤左千夫 1864 生「去年」

e. 友の居ると居ないににかかわらず自由に階段を上るのを許されていた。

寺田寅彦 1878 生「雪ちゃん」

## 2.4 「と」：節が埋め込まれる場合

節に「と」が接続し、動詞「思う、言う」などの補部となる場合でも主格マーカー「の」があらわれる。

(43) a. 彼が余の帰ったと知らぬ為に

黒岩涙香 1962 生「幽霊塔」

b.\* 太郎はきのう二郎の来たと思った。

(Harada 1971 (10c))

c.\* [メアリーが [ジョンの買ったと] 思っている] 本

(Watanabe 1996 (39c))

Harada (1971), Watanabe (1996) は現代日本語では埋め込まれた節で「が／の」交替が起こらないことを示している ((43b, c))。近代日本語で主格マーカー「の」が許される環境としては、以下の用例を考慮すると、「と」をホストと考えたほうが、つまり従属節を環

近代文学作品における「が／の」交替

境と考えたほうがよいだろう。

次の用例は動詞「思う」の補部として節が埋め込まれている場合である。3つ目以降は動詞のあとに名詞があり、節はそれだけ深く埋め込まれることになる。

- (44) a. わざわざここまでとまどいをして入り込む人のあろうとも思われません。

中里介山 1885 生「大菩薩峠 19 小名路の巻」

- b. よもや彼の老練な人が其道に手ぬかりなどの有らうとも思はれない。

島崎藤村 1872 生 1872 生「破戒」

- c. それならば情涙の涸渴したと思っていたこの薄雲太夫の後身にも

近松秋江 1876 生「霜凍る宵」

- d. 母の呼ぶと思う、なつかしい声を、いま一度、もう一度、くりかえして聞きたかったからであった。

泉鏡花 1873 生「小春の狐」

- e. お前だって、今に子供の欲しいと思う時機があるんだから、これを自分の子だと思っていれば、それでいいわけだ。

徳田秋声 1871 生「爛」

- f. 準之助氏の居ると思われる部屋をソツとのぞくと、  
他の動詞の用例を示す。

菊池寛 1888 生「貞操問答」

- (45) a. 交易の道は小さな損害のないとも言えないが、

島崎藤村 1872 生「夜明け前 03 第二部上」

- b. ほとりには、その大抵が三四十年前に外人の建てたと言われる古いバンガロオが雑木林の間に立ちならんでいた

堀辰雄 1904 生「美しい村」

- c. 実際私は六歳の帰りのあまりおそいと知ってからは、どうもこの高い石垣の上から六歳の墜落して死んだように感じたのであります。

国木田独步 1871 生「春の鳥」

- d. 政治的覚醒の著しいと見られていない地方を対象とした。

宮本百合子 1899 生「しかし昔にはかえらない」

「と」節が動詞の補部ではない場合もある。

- (46) 決して散歩の同伴者に男性をまちへなかつた先生が、恋のはじまるとまもなく、男性それも若く快活にして麗しい青年のみを数名選び、散歩のお供の列に加へた。

坂口安吾 1906 生「不可解な失恋に就て」

節が「という」を介して名詞と結びつけられることもある。

- (47) a. やがて銀杏が小包で届いて来た、遅れ走にまた乳母の死んだという知らせが、そこへ来たので、

尾上梅幸 1870 生「薄どろどろ」

- b. やはり平均気温の高いということが涼しさの第一条件でなければならない。

寺田寅彦 1878 生「さまよえるユダヤ人の手記より」

- c. 彼はパラメントヒルで、死骸の傍に立っていた伯父を見たという件は、寧ろ伯父の

加害者でないという事実を立証するものであると力説した。

松本泰 1887 生「P 丘の殺人事件」

## 2.5 「か」

節に疑問の「か」が接続しても主格マーカー「の」が許される。

- (48) a. 辺鄙な飛驒の山の方へ行って、それのできるかどうか、これまたすこぶる疑問であった。  
島崎藤村 1872 生「夜明け前 04 第二部下」
- b. 実際狐の化けたかどうかは僕にはどちらでも差支へない。  
芥川龍之介 1892 生「本所両国」
- c. 主人に此上なく忠實な呉葉よりも先に殿の来るか来ないかがわかつた。  
田山花袋 1872 生「道綱の母」
- d. 僕は小説や戯曲の中にどの位純粋な芸術家の面目あるかを見ようとするのである。  
芥川龍之介 1892 生「文芸的な、余りに文芸的な」
- e. 細くて、きやしやで、日盛りのあるかないかの風にも、しなしなと揺れるほどの草ですが、  
薄田泣菫 1877 生「石竹」
- f. わが烈しき力の銷磨しはせぬかとの憂を離れたるのみならず、  
夏目漱石 1867 生「草枕」

問題の節はすべて主節ではない。

## 2.6 ホストが存在しない場合

### 2.6.1 用言の連体形 1：大きな節に含まれる場合（従属節の場合）

古い日本語では、用言で終わる節自体が名詞相当の振る舞いをすることができる。そうした場合も主格マーカー「の」が許される。用言が連体形であることは、形容動詞（ナ形容詞）の場合、その形からわかる。形容詞（イ形容詞）・動詞の連体形は終止形と同じである。

- (49) a. 御覧なさい、こうやって、五体の満足なはいうまでもない、  
泉鏡花 1873 生「薬草取」
- b. 「目の不自由なというそなたが」  
中里介山 1885 生「大菩薩峠 06 間の山の巻」
- c. 「日も西山にかたむき、折ふししよほへ雨のふるをいとはず、  
芥川龍之介 1892 生「案頭の書」
- d. 事務官が、黒い背広をきて、私たちの入ったとは反対側のドアから入ってきた。  
宮本百合子 1899 生「ある回想から」
- e. 額のあたり筋立ち、こめかみ顫き、煙管持つ手のわなわなと震わるるを、ようよう押ししずめて、  
徳富蘆花 1868 生「不如帰」

近代文学作品における「が／の」交替

- f. おまへ様のお心に曇りのないは、不断からよく知つてみながらも、  
岡本綺堂 1872 生「番町皿屋敷」
- g. 親に縁の薄いとは、丁度お志保の身の上でもある。 島崎藤村 1872 生「破戒」
- h. ただし最古く香の知識の発達したはまずアジア大陸諸国で、  
南方熊楠 1867 生「十二支考 05 馬に関する民俗と伝説」
- i. いちばん御拜の長かったは母上で、 寺田寅彦 1878 生「祭」
- j. 搏つ音の絶えたるは一時の間か。暫らくは鳴りも静まる。  
夏目漱石 1867 生「幻影の盾」
- k. 小野さんは無然として咳の終るを待つ。 夏目漱石 1867 生「虞美人草」
- l. 汝が不足な程に此方にも面白くないのあるは知れきつた事なれば、  
幸田露伴 1867 生「五重塔」

最後の例は「面白くない」に主格マーカー「の」がついている。「面白くない」が名詞として機能している。

本小節で見た用例は、主格マーカー「の」を含む節がさらに大きな節に含まれる場合であった。次小節は問題となる節が主節である場合である。

## 2.6.2 用言の連体形 2：主節の場合

今まで見た用例はすべて主格マーカー「の」が何らかの形で従属的な節内であらわれた。

(50) [<sub>a</sub>… [節…名詞句-の…] …] a = 別の節／別の名詞が主要部となる名詞句

すなわち、上の構造のように、節の上にそれを従える構成素があった。本小節では問題となる節が、上記の a がいない構造であられる場合を示す。むき出しの節であるにもかかわらず「の」があらわれているのである。注意しなければならないのは、文脈の上で先行する名詞を修飾すると考えたほうがよい節がその名詞のあとにあらわれる場合があり、それらとは区別しなければならないということである。

(51) 「高さんて船の中にいた中国人あったでしょう。ダンスの上手な。

横光利一 1898 生「旅愁」

この用例では「ダンスの上手な」が表面的には独立しているが、意味の上では先行する「中国人」を修飾し、「ダンスの上手な中国人」と解釈することになる。すると「ダンスの上手な中国人」は主格マーカー「の」が出現する（現代日本語における）典型的なパターンなので、そうした用例は除くことにする。

具体例を見る前にさらに注意をすると、形容動詞が「～な」という連体形であられるとき、必ずしもそのあとに名詞を要求しない。

(52) a. 「何だ、臆病な。昼じゃあないか。」

泉鏡花 1873 生「化銀杏」

b. 「何ねえ、高慢な。」「高慢じゃないわ。

泉鏡花 1873 生「吉原新話」

c. 「折角やったのに失礼な。」

岡本かの子 1889 生「岡本一平論」

これらの場合、「～な」形の形容動詞が修飾する名詞は表現されていない。(これらの表現が断片的であり、「奴だ」のような表現が省略されていると考えることも可能であろう。)

「な」形の形容動詞が独立してあらわれることがあると考えると、次の用例はむき出しの節の中に「の」があらわれていると見なすことができる。

(53) 遠く御里を離れての旅の者も同じ御身上で、真実に同情のあるものは一人も無い。こればかりでも、女は死にます。奥様の不幸な。歓楽の香は、もう嗅いで御覧なさりたくも無いのでした。奥様は歎き疲れて、乾いた草のように萎れてしまいました。

島崎藤村 1872 生「旧主人」

(形容動詞の) 連体形の前に「の」があらわれているので、「の」は純粋な主格マーカーではないという見方も考えられるが、本小節では主格マーカーと見なし、これに類した用例を取り上げる。(以下では用言が連体形か終止形か区別できない。)

まず、否定の「ない」と主格マーカー「の」が共起する場合が多い。

(54) a. 「また、羽織を曲げて着てますね。だらしのない」

岡本かの子 1889 生「母子叙情」

b. 「なんだ意気地のない。しっかり見とれ、

岡本かの子 1889 生「食魔」

c. 「チェッ！ なんだろう、まあだらしのない！

林不忘 1900 生「丹下左膳 01 乾雲坤竜の巻」

d. 「まあ、まあ、どうしたものだ、そんな愛嬌のない」

田中貢太郎 1880 生「南北の東海道四谷怪談」

e. ほんとに白鷹先生ったら仕様のない。稼ぐ事ばかりし夢中になって……

夢野久作 1889 生「少女地獄」

f. 何だね、お前たちはそんな意気地のない。

中里介山 1885 生「大菩薩峠 09 女子と小人の巻」

g. 彼は部屋に入って席に著くと、二つの眼が異常に光った。彼の眼はいろいろのものを見ながらはなはだ攫みどころのない。キンカ糖の塔のように崩れた行先が眼の前に横たわった。

井上紅梅 1881 生訳・魯迅 1881 生「白光」

h. また渠は、一体甚麼人を見ても羨むといふことのない。

石川啄木 1886 生「赤痢」

i. 愛のない性的交渉を強制される点では伝ネムの妻であった彼女の場合より比較にならぬ惨苦につき入れられている貧困な、無力無智な女の群に対し、「女には全く用のない」と云いすてても、それですむものなのであろうか。

宮本百合子 1899 生「昨今の話題を」

これらの用例の特徴として、会話文で叱責するような場面が多いことが挙げられよう。ま

近代文学作品における「が／の」交替

た、用例のいくつかは「象は鼻が長い」の型をしていると言えるかもしれない ((54f-h))。

次は述部が「悪い」などの形容詞の場合である。

(55) a. 「なんです。気味の悪い。放して下さい。 太宰治 1909 生「新ハムレット」

b. 「それが気味のわるい。

佐々木味津三 1896 生「右門捕物帖 30 闇男」

c. 「口の悪い」と美禰子は三四郎を弁護するように言ったが、

夏目漱石 1867 生「三四郎」

d. 「まあ、虫のいい！ いいかげんにはできませんよ」

林不忘 1900 生「丹下左膳 01 乾雲坤竜の巻」

e. はてさて茶漬けの用意でござるか。ても手廻しのよい」

織田作之助 1913 生「猿飛佐助」

f. 此くて彼は解剖室へ入った。解剖室の空気の冷い！

三島霜川 1876 生「解剖室」

g. しんとして薄気味の悪いよう。」

泉鏡花 1873 生「開扉一妖帖」

次は動詞の場合である。

(56) a. 糸、口惜い、腹の立つ、

幸田露伴 1867 生「五重塔」

b. 「ほら、これでも得心のいかぬか！」薄い母の掌に、緑の粉を吹いた大きい忒銭

林美美子 1903 生「風琴と魚の町」

c. ほんとに女子供の気の付かぬ。

菊池寛 1888 生「藤十郎の恋」

d. とたんに小鳥の囀り止む。

加藤道夫 1918 生「なよたけ」

e. こわいばかりがこの方の身性ではない。ほんとうに思いやりのある！

林不忘 1900 生「丹下左膳 03 日光の巻」

腹が立っているという現在の状況を述べるのに「立つ」という形を使っているところが特徴的である。

次は全体で名詞句を成しているという分析も可能かもしれない。

(57) a. 「お姉さんの馬鹿！」

菊池寛 1888 生「貞操問答」

b. 「やい！ 南條先生の意地わる！」と、いって笑いながら、

菊池寛 1888 生「貞操問答」

c. 「ばか！ あたしの赤とんぼをつかまえたりなんかして——山田のばか！」

新美南吉 1913 生「赤とんぼ」

d. いいわよ、にいさんのいじわる！

江戸川乱歩 1894 生「魔法人形」

これらは、下の用例を見ると2つの名詞句が「の」で結ばれているだけだと考えるのが妥当なようにも見える。

(58) a. 但馬のばかが、また来ましたよ、なんて言って笑いながら、

太宰治 1909 生「きりぎりす」

- b. 其様な時に限って生憎と、茶の間辺で伯母さんの奥さんの意地悪が私を呼ぶ、  
二葉亭四迷 1864 生「平凡」

## 2.7 二重主語構文

日本語に特徴的な二重（多重）主語構文と「が／の」交替の関係については、次のような例が挙げられている。

- (59) 太郎 {が／の} 英語 {が／の} わかること (Ochi 2017 (6))

上は本稿の最初にも挙げた例であるが、二重主語構文と「が／の」交替の関連では「が-が」「が-の」「の-が」「の-の」の4パターンが起こるとされる。その4パターンを確認しておく。

- (60) a. 児童が書物が好きなのは此上も無い結構な咄、  
内田魯庵 1868 生「家庭の読書室」
- b. 父が碁が好きなもんですから、  
清水紫琴 1868 生「当世二人娘」
- c. 貴方は、私が雷が嫌いなものをご承知でいらっしゃいましょう。  
小栗虫太郎 1901 生「白蟻」
- d. 叔母は私が甘い物の好きなのを能く知っていた。  
河上肇 1879 生「御萩と七種粥」
- e. 姫がお話の好きな事から、身の上話を買いに出かけた事、そうして銀杏の根本でこの書物を見つけたところまで、すっかり詳しく書いてあるものだから、  
夢野久作 1889 生「白髪小僧」
- f. あなたの春が好きなことにも私は喜びを感じる。  
与謝野晶子 1878 生訳・紫式部「源氏物語 19 薄雲」
- g. 「その男の水の上の好きなことと申しましたら、  
岡本かの子 1889 生「河明かり」
- h. 私の碁の好きなのを知って、碁を打て〜と云いますから、  
三遊亭円朝 1839 生「業平文治漂流奇談」

## 2.8 まとめ

2節では、節のホストという観点を中心に、どのような環境に主格マーカー「の」が出現するかを見た。ホストが名詞であるもの、名詞でないもの、断定しにくいものなど、さまざまな場合があることを見た。多くの場合、問題となる節は他の節に包含され、主節に対して従属的な構造関係にあるが、主節にも「の」があらわれることを最後に見た。3節では「が／の」交替の分析に関するいくつかの提案に関連して、それらからは予測されない事実が近代日本語に存在することを見る。

### 3 現代日本語の「が／の」交替に関する分析から予測されない用例

#### 3.1 節の述部：用言は必ず連体形か

Hiraiwa (2005) は述語が連体形であることが必須であると主張する。そして、それが以下の文の容認差を説明すると考える。

(61) a. ジョンはクラスでメアリー {が／\*の} 一番きれいだと思った。

b. ジョンはクラスで誰 {が／\*の} いちばんきれいだか尋ねた。

現代日本語では動詞と形容詞（イ形容詞）については連体形が終止形と同形であるため、区別はできないが、形容動詞（ナ形容詞）においては形が異なる（「豊かな／豊かだ」）。上の例は形容動詞が連体形でないため主格マーカー「の」が不自然であると Hiraiwa は考える。

主格マーカー「の」と連体形でない形容動詞が1つの節中にあらわれる場合もある。形容動詞が等位接続されている場合である。これは形容動詞（ナ形容詞）が他の用言の前にある場合だから（形容動詞＋形容詞など）、形容動詞が連用形であるのは表面的であると考えることができる。等位接続された構成素は大きな形容詞句を成し、その句が連体形と考えることもできよう。

具体例を見よう。最初の例では「立派な」でなく「立派で」なので連体形ではない。だが、「立派で美しかった」が構成素をなし、全体で名詞「こと」を修飾する連体形になっていると考えることができる。それ以下の用例も同様に考えることができよう。

(62) a. 中学の五年のとき、ちょうど日清戦争時分に名古屋に遊びに行き、そこで東京大相撲を見た記憶がある。小錦という大関だか横綱だかの白皙の肉体の立派で美しかったことと、朝潮という力士の赤ら顔が妙に気になったことなどが夢のように思い出されるだけである。 寺田寅彦 1878 生「相撲」

b. 実感の豊かで、強い内容は、稲子さんが云っているとおり、 宮本百合子 1899 生「文学と生活」

c. 見た目のにぎやかで派手なのはこちらにあった。 与謝野晶子 1878 生訳・紫式部「源氏物語 17 絵合」

d. 五雲の絵の派手で、そして優れてゐるのはその理由に基づく。 小熊秀雄 1901 生「小熊秀雄全集-19 美術論・画論」

次の用例は、上と同じように考えると、句レベルの等位接続ということになる（たとえば形容動詞句「道具立ての立派で」と動詞句「真に迫る」）。

(63) a. 道具立ての立派で真に迫ること、光線の使用の巧みなことはどこでも感心します。 寺田寅彦 1878 生「先生への通信」

b. そこに人間の自主的で、状況をのりこしてゆく愛情があるわけである。



宮本百合子 1899 生「女性の歴史」

- c. そのようなところにも、計らず日本の性格の中間的であり、簡素さが現われているのだろうか。

宮本百合子 1899 生「世代の価値」

- d. けれども、C 先生、私がよく申上た通り私は自分で、渾一の如何に偉大であり、又如何に至難な事であるかを知って居ります。

宮本百合子 1899 生「C 先生への手紙」

最後の用例は形容動詞「偉大な」が動詞「ある」に連なり、「ある」を主要部とする 2 つの動詞句が等位接続されているのではないか（「如何に偉大であり」と「如何に至難な事である」）。すると「偉大に」という連用形を表面的な形として分析することはできない。

2.2.10 節で見た「そうに」は連体形であれば「そうな」となるから、連体形でない「そうに」と主格マーカー「の」が共起していることがわかる。参考までに「そうな」の用例を示す。

- (64) a. 彼は少しまりの悪そうな様子をしてようやく用向を述べた。

夏目漱石 1867 生「明暗」

- b. いつも顔中髯だらけにしてその中から意地の悪そうな細い眼を光らしている男だった。

大杉栄 1885 生「獄中記」

- c. あの意地の悪そうな、苦りきった面色が、泣くとも笑うともつかない気色を浮かべて、眼ばかりぎよるぎよる忙しそうに、働かせて居るのでございます。

芥川龍之介 1892 生「邪宗門」

次の用例では、形容動詞「～な」が「～だ」となっている。

- (65) a. それは少女時代彼女の好きだった、そして今でも好きだと父の思っているようなものばかりらしかった。

堀辰雄 1904 生「風立ちぬ」

- b. そこへ長唄の好きだとかいう御母さんが時々出て来て、

夏目漱石 1867 生「彼岸過迄」

- c. 皆手に小さく美しい袋を下げている。まあ帯の立派だこと！

宮本百合子 1899 生「貧しき人々の群」

以上、形容動詞が連体形でない場合にも、近代日本語では主格マーカー「の」が出現することを見た。次の用例は、形容詞が連体形ではないと考えられる場合である。

- (66) a. 無理に笑顔は作りながら底に萎れし處のあるは何か子細のなくては叶はず、父親は机の上の置時計を眺めて、こりやモウ程なく十時になるが關は泊つて行つて宜いのかの、

樋口一葉 1872 生「十三夜」

- b. 氣位たかくて人愛のなければ最負にしてくれる人もなく、あゝ私が覚えて七つの年の冬でござんした、

樋口一葉 1872 生「にぎりえ」

- c. それと絡みあって親密な一面があるだけに却って消えることのなく意識される二人

の気質の異いから来る一種のぎごちなさ、間隔の感じは、

宮本百合子 1899 生「雑沓」

### 3.2 節の大きさ

Miyagawa (2011) は「が／の」交替で問題となる節内の主語が「が」でマークされる場合と「の」でマークされる場合とでは節の大きさが異なると主張する。後者の「の」の場合、節は時制 (Tense; T) を主要部とする時制句 TP だが、前者は TP を包含する、それよりも大きい構成素 CP (補文標識 Complementizer が主要部) であると考え。そして、それは次の例により支持されると主張する。

(67) a. [幸いに太郎 {が／\*の} 読んだ] 本

b. [きっと太郎 {が／の} 読んだ] 本

Miyagawa は「きっと」のような認識に関わる表現は TP につくので「きっと」と「の」は共起するが、「幸いに」のような判断に関する表現は CP につくので「幸いに」と「の」は共起しないと考える。「の」が主格マーカーとして使われている節が TP であるならば、「幸いに」という表現がつく位置が保証されないという理屈である。

Miyagawa は、主格マーカー「の」の使用を阻む日本語の副詞として具体的には「幸いに」しか挙げていないが、英語の *honestly*, *unfortunately*, *evidently* などが相当すると言う。ここでは、それに類すると考えらえる表現「不幸にも、たしかに、明らかに」を含む用例も示す。

(68) a. 労働者はドシ―街頭におっぼり出される。幸いに首のつながっている労働者は、ます―科学的に、少しの無駄もなく搾しほられる。

小林多喜二 1903 生「工場細胞」

b. しまだ不幸にも御存じのない方があれば、どうか下に引用した新聞の記事を読んで下さい。

芥川龍之介 1892 生「白」

c. ただの飛脚ならばなんでもないが、その足どり、身のこなし、たしかに見覚えのある、それは、がんりきの百蔵というやくざ者に相違ないということを、確認したからです。

中里介山 1885 生「大菩薩峠 40 山科の巻」

d. 人血で書かれた“Jack the Ripper”の署名ある葉書と手紙を、何者かの悪戯でなくたしかに犯人の書いたものと認めれば

牧逸馬 1900 生「女肉を料理する男」

e. 納戸から取り出して貫って、明るい所で眺めると、たしかに見覚えのある二枚折であった。

夏目漱石 1867 生「門」

f. たしかに思慮の足りないやり方だし、それに文明的ではないからぬ。

下村湖人 1884 生「次郎物語 04 第四部」

- g. たしかにまちがいのないことを知ると、彼は歯をくい縛り、思わず力を両手にこめた。  
中島敦 1909 生「李陵」
- h. 確かに見覚えのある森である。  
折口信夫 1887 生「身毒丸」
- i. また飛び込んで斬ると、「あッ！」といったのは確かに手答えのある声。  
中里介山 1885 生「大菩薩峠 21 無明の巻」
- j. 私は自分でも明らかに意味のわからないことをいって訊いた。  
近松秋江 1876 生「うつり香」
- k. 書物の上で明らかに言ふ事の出来る個處は、  
折口信夫 1887 生「国文学の発生（第三稿）」
- l. 産め、殖やせという標語をそれだけの範囲でうけて、互に結婚して、偶然にも子供のもてない良人の体質であったとき、その女性はどうするのだろうか。  
宮本百合子 1899 生「結婚論の性格」

### 3.3 動詞のタイプ

Miyagawa (2012) は、以下のような容認度の差があると主張する。

- (69) a. 子供 {が／\*の} 笑ったとき、隣の部屋にいた。(Miyagawa 2012: 151 (9))  
 b. みんな {が／? \*の} 踊ったとき、にぎやかになった。(Miyagawa 2012: 152 (12))  
 c. 子供 {が／の} 来たとき、隣の部屋にいた。(Miyagawa 2012: 152 (13))  
 d. 風でドア {が／の} 開いたとき、誰も気づかなかった。(Miyagawa 2012: 152 (14))

注意しなければならないのは、ホストが「とき」の場合、常にこうした差があるのではないということだ。「とき」が「が」や「を」でマークされ、項となる場合にはこうした容認差は見られないと Miyagawa は言う。これらの場合は「とき」は名詞であり全体で名詞句を成すが、上の例では「とき」は CP の主要部の位置（補文標識 C）にあると Miyagawa は主張する。理論の詳細は省くが、依存時制（dependent tense）の働きにより、「の」でマークされる主語は非対格動詞（unaccusative verb）の主語であるか、他動詞の目的語が受身で主語になった場合に限られると言う。

非対格動詞、そして関連する非能格動詞について述べておく。乱暴な解説をすると、自動詞は主語の性質により 2 タイプに分類でき、それが前出の非対格動詞と非能格動詞（unergative verb）である。非対格動詞の主語（「皿が割れる」の「皿」）と他動詞における目的語（例えば「皿を割る」の「皿」）は、意思をもたない・変化を被るなどの点で似通っている。非対格動詞としては go, arrive, fall などが挙げられる。それに対して、非能格動詞の主語は他動詞の主語（「一郎が割る」の「一郎」）と、意思や主体性があるといった点で似通っている。非能格動詞としては、英語だと laugh, dance, run, swim などがよく引き合いに出される。言語理論によっては、同じ自動詞ではあっても非対格動詞の主語と非能格動詞のそれは、

構造上、異なった位置を占めると仮定され、Miyagawa の議論もそれに則っている。

Miyagawa の主張に従えば、「笑う、踊る」などの非能格動詞以外に他動詞の主語も「の」でマークされることが許されなくなる。事実はどうだろうか。まず、他動詞の主語が「の」でマークされ、目的語が出現する用例を示す。加えて、他動詞の主語だけが出現し、それが「の」でマークされる用例を示す。最後に自動詞で非能格動詞であると考えられる用例を挙げる。

(70) a. 父の野良犬を追うとき、小柄でも投げるように、小石は犬にあたった。

室生犀星 1889 生「幼年時代」(Shibatani 1975 (31a))

b. 蒙古人の酒を飲むときには先づ一番先に家の中の神様に捧げる。

桑原隲蔵 1871 生「元時代の蒙古人」

c. さうして太夫の長持を昇ぎ込む時にあゝいふ音をさせるのだといった。

長塚節 1879 生「菜の花」

d. 私の誇りかなる時は誇りかとなり、私の謙遜な時は謙遜となり、私の愛する時愛し、私の憎む時憎み、私の欲するところを欲し、私の厭うところを厭えばいいのである。

有島武郎 1878 生「惜みなく愛は奪う」

e. いやたしかにムビウムはあったのである、自分の見たときには、まちがいなくあったのである。

海野十三 1897 生「大宇宙遠征隊」

f. 歩き廻る役は、だんだんつらくなって、人の見ていない時は這ったりしだした。

長谷川時雨 1879 生「旧聞日本橋 25 渡りきらぬ橋」

g. あの家は私の知らないときたたまれたのでしたし。

宮本百合子 1899 生「獄中への手紙 06 一九三九年（昭和十四年）」

h. 真紀子の電話したとき高は家にいなかったから、

横光利一 1898 生「旅愁」

i. 海岸の小学校に通っている位の女の子たちは、大人の女の働くとき交って手伝うだけで、

宮本百合子 1899 生「漁村の婦人の生活」

j. 村の人の遊ぶとき、ことにお祭り日などには、

内村鑑三 1861 生「後世への最大遺物」

### 3.4 主語と述語の間に介在する構成素

「の」でマークされた主語と述語（用言）の間に他の構成素が介在すると容認度が落ちることは先行研究ですでに指摘されている。とりわけ、要素が2つ以上の場合には不自然であると考えられている。Harada (1971, 1976) は、当時において、容認度に関して年齢差が関与することを指摘している。以下の表現は新世代では不自然に感じられるが前の世代では容認されると Harada (1971) は述べている（カッコ内の容認度は新世代グループのものを示し、

前の世代では容認される。)

- (71) a. (\* 私はニクソンのうそについていることを悟った。 (Harada 1971 (12b))  
 b. (\* 太郎は米軍のラオスに侵攻したのに驚いた。 (Harada 1971 (13b))  
 c. (?\*) 芽のなかなか出ない桜の木 (Harada 1971 (14b))  
 d. (?\*) 父親の大音楽家であった物理学者 (Harada 1971 (15b))  
 e. (?\*) 人口の500万だった都会 (Harada 1971 (16b))

だが、どちらのグループでも、介在要素が2つ以上の場合は不自然に感じられると言う。

- (72) \*子供たちのみんなで勢いよく駆けのぼった階段 (Harada 1971 (17b))

なお、関係節の場合は介在要素が1つであっても容認されないと Harada は述べている。

(ホスト「本」が意味的に「貸す、借りる、買う」の目的語に相当するので関係節となる。)

- (73) a.\* 太郎の花子に貸した (二郎の) 本 (Harada 1971 (18b))  
 b.\* 太郎の花子に借りた (二郎の) 本 (Harada 1971 (19b))  
 c.\* 太郎の花子から買った (二郎の) 本 (Harada 1971 (20b))

こうした例には個人差があり、Watanabe (1996) は (73a) のパターンには「\*」でなく「??」の判断を与えている。

近代文学作品の用例を見てみよう。次は「の」でマークされた主語と述語の間に構成素がある場合である。Harada は、構成素を句と考えているので、次の用例は介在する構成素の数としては1つである。

- (74) a. 外は寒暖計の度盛の日を逐うて騰る頃であった。 夏目漱石 1867 生「それから」  
 b. あらゆる場合に於て、彼の決して仕損じまいと誓ったのは、凡てを平岡に打ち明けると云う事であった。 夏目漱石 1867 生「それから」

次の用例はすべて介在する構成素の数は2つであるが、上記と比較すると語数も問題にすべきだと感じる。

- (75) a. それだから、自分の昔し世に処した時の心掛けでもって、代助も遣らなくっては、嘘だという論理になる。 夏目漱石 1867 生「それから」  
 b. その姿のちらりと眼前に起った時、またかと云う具合に、すぐ切り棄ててしまった。 夏目漱石 1867 生「それから」  
 c. 三四郎はこの問答で、はじめて、この両人の今何をしていたかを悟った。 夏目漱石 1867 生「三四郎」  
 d. 与次郎は煙草の煙の、二、三本鼻から出切るあいだけ控えていたばかりで、そのあとは、一部始終をわけもなくすらすらと話してしまった。 夏目漱石 1867 生「三四郎」  
 e. しかしその比較のほとんど文学的といいうるほどに要領を得たには感服した。 夏目漱石 1867 生「三四郎」

近代文学作品における「が／の」交替

- f. 代助には、平岡の凡てが、あたかも肺の強くない人の、重苦しい葛湯の中を片息で泳いでいる様に取れた。夏目漱石 1867 生「それから」

関係節と見なせる用例を見る。節内の動詞とホストとなる名詞が述語と項の関係にある。すでに触れたが、Harada (1971) は介在する要素が1つでもあると容認されないと言う。

- (76) a. わしは明智などの夢にもしらぬ手がかりをにぎっておりますのじゃ。

江戸川乱歩 1894 生「妖怪博士」

- b. 四十面相の右手にももっている懐中電灯がパッとつきました。

江戸川乱歩 1894 生「夜光人間」

- c. 三千代さんの君に詫まる事と、僕の君に話したい事とは、恐らく大いなる関係があるだらう  
夏目漱石 1867 生「それから」

現代日本語から見た場合、「夢にも」のような副詞的要素と「君に」のような項とでは何らかの区別をすべきではないだろうか。

### 3.5 目的語の介在：他動詞の問題

Watanabe (1996) は目的語が介在すると（あるいは、主語より前の位置にあらわれても）、主語を「の」でマークできないと主張する。（以下、判断は Watanabe のものである。）ここでの目的語とは「を」でマークされる名詞である。

- (77) a. \*きのうジョンの本を買った店 (Watanabe 1996 (4a))  
b. \*ジョンのLGBを貸した人 (Watanabe 1996 (6b))  
c. \*LGBをジョンの貸した人 (Watanabe 1996 (6c))  
d. \*ジョンのうそをついたこと (Watanabe 1996 (5b))  
e. \*うそをジョンのついたこと (Watanabe 1996 (5c))

同様の容認差の対比として別の例も挙げている。

- (78) a. ジョンのアメリカへ行ったこと (Watanabe 1996 (5a))  
b. ジョンの日本へ帰った日 (Watanabe 1996 (6a))  
c. ??ジョンのメアリーに貸した本 (Watanabe 1996 (7))  
d. メアリーにジョンの貸した本 (Watanabe 1996 (8))

ここから、動詞の他動性に関する制約が存在すると Watanabe は考える。

Harada (1971), Shibatani (1975) などで近代日本語にはそうした制約に従わない用例があることがすでに指摘されている。

- (79) a. 恋愛の死を想わせるのは進化論的根拠を持っているのかも知れない。

芥川龍之介 1892 生「侏儒の言葉」(Harada 1971 (26b))

- b. 「芸術家の芸術を売るのも、わたしの蟹の鑑詰めを売るのも、格別変りのある筈はない。  
芥川龍之介 1892 生「侏儒の言葉」(Harada 1971 (26c))

c. 聖人の謔をつかれる筈はない。

芥川龍之介 1892 生「齒車」(Shibatani 1975 (30a))

d. が、Sの返事をしないのを見ると、急に彼に忌々しさを感じ、力一ぱい彼の頬を擲りつけた。

芥川龍之介 1892 生「三つの窓」(Shibatani 1975 (30b))

同じような用例を示す。

- (80) a. 留守のまに、細君が知合いの家で、よく花を引いて歩いたり、酒を飲んだり、買食いをしたりすることなどを、浅井はお増にこぼした。それに病気が起ると、夜中でも起きて介抱してやらなければならなかった。それだけでも浅井の妻を嫌う理由は、充分であった。  
徳田秋声 1871 生「爛」
- b. 我々の晝生をしているころには、する事なす事一として他を離れたことはなかった。  
夏目漱石 1867 生「三四郎」
- c. ヘーゲルのベルリン大学に哲学を講じたる時、ヘーゲルに毫も哲学を売るの意なし。  
夏目漱石 1867 生「三四郎」
- d. その時父は頗る熱した語気で、先ず自分の年を取っている事、子供の未来が心配になる事、  
夏目漱石 1867 生「それから」
- e. ロシアと戦争をしてからは、西洋の学者が一般に、日本人の命を惜まないことを知って、一種の説明をしている。  
森鷗外 1862 生「青年」
- f. 兵馬の、芝居を知らないことは、これらの人々より一層上で、  
中里介山 1885 生「大菩薩峠 24 流転の巻」
- g. 「何だい」といって、私の封を開くの傍に立って待っていた。  
夏目漱石 1867 生「ころろ」
- h. たちまち竿を棄てて、小作人の手を合わせるのが見えました。  
橘外男 1894 生「棚田裁判長の怪死」
- i. 私の長寝をするのを知つてゐて、  
近松秋江 1876 生「箱根の山々」
- j. 私は例のごとく頂上に登って、やや西に傾いた日影の遠村近郊をあかく染めているのを見ながら、持って来た書物を読んでいますと、  
国木田独歩 1871 生「春の鳥」

次のような場合は分析に注意が必要である。

- (81) ふたりの息づかいや、腕時計の秒をきざむ音までが聞こえるほど、部屋のなかはずまりかえていました。  
江戸川乱歩 1894 生「怪人二十面相」
- この場合「腕時計の」が「音」(厳密には「秒を～音」)を修飾している可能性も考えられる。これは「腕時計の音」の意味解釈が可能であることと、「秒をきざむ腕時計の音」という語順が可能と考えられるからである。次の用例は「或る」が次の節を超えて「夏帽子」を修飾している。

近代文学作品における「が／の」交替

(82) それは何でもないつまらぬことで、或る私の好きな夏帽子を、被つてみたいといふ願ひである。 萩原朔太郎 1886 生「夏帽子」

「或る私」では意味をなさないことが構造を決める手がかりとなる。実際に「秒をきざむ腕時計の音」のような語順の用例も見つかる。

(83) ざアざアと屋根を叩く雨の音が彼女を落ちつかせた、 武田麟太郎 1904 生「一の酉」  
これらを踏まえると、次の用例は2通りの構造分析が可能であると思われる。

(84) 三吉は子供のウマそうに乳を呑む音を聞きながら、 島崎藤村 1872 生「家2（下巻）」

主格マーカー「の」が接続する名詞の前に、節内にしかあらわれない形の表現があれば構造ははっきりする。あるいは、ホストが「の」などである場合も判断がしやすい。

(85) a. 四階の部屋に寝ていた信子は、どこかで人の呼ぶような声を聞いて目を覚ました。 松本泰 1887 生「宝石の序曲」

b. 番小屋の中から、優しく、細い、澄んだ声で、お優さんの、澄まして唄うのが聞こえました。 泉鏡花 1873 生「河伯令嬢」

Watanabe (1996) は目的語が先行する場合、主語を「の」でマークすることはできなくとするが、そうした用例も見つかる。

(86) a. この問題を広子の知ったのは四五日前に受け取った辰子の手紙を読んだ時だった。 芥川龍之介 1892 生「春」

b. 伊藤公の狙撃されたと云ふ場所に立つて、其日眼前に見た話を軍司氏の語るのを聞いた。 与謝野晶子 1878 生「巴里より」

c. 若い女の語学教師のアンリエットが久慈の所へ出入するのを矢代の見るようになったのは、それから間もなくのことだった。 横光利一 1898 生「旅愁」

d. 朝家を出るとき敷島を口に咥え、ひらりと自転車に乗るときのゆったりした高次郎氏の姿を私の見たのは一度や二度ではなかった。 横光利一 1898 生「睡蓮」

目的語が長く、主語が短いという特徴がある。

### 3.6 取り立て助詞

Akaso & Haraguchi (2011) によると「だけ、さえ」などの取り立て助詞は主格マーカー「の」と共起できないと言う。

- (87) a. \*太郎だけの飲んだ薬 (Akaso & Haraguchi 2011 (11a))  
b. \*学生ばかりの買った本 (Akaso & Haraguchi 2011 (11b))  
c. \*高校生のみの選んだ漫画 (Akaso & Haraguchi 2011 (11c))  
d. \*太郎さえの食べたケーキ (Akaso & Haraguchi 2011 (11d))

近代日本語にそうした表現を見つけることができる。



- (88) a. ミス・ジョーンズの素振りは、いい看護婦だけのもつまめな親切にあふれていた。  
 宮本百合子 1899 生「道標」
- b. 私は夫人に気に入ろうとするのあまり、夫人の質問を待とうとせずに、私だけの知  
っている A 氏の秘密まで、いくつとなく洩らした位であった。  
 堀辰雄 1904 生「窓」
- c. 道徳は教育家ばかりの私するものでないのですから、その古風な頭脳のみで御判断  
 なされずに、  
 与謝野晶子 1878 生「離婚について」
- d. 蒐集家のみの知る喜びや悲しみはかう云ふ僕には恵まれてゐない。  
 芥川龍之介 1892 生「蒐書」
- e. だがその積極性の無条件な徹底は、遂に慰安と休息さえのないアンニュイに陥る。  
 戸坂潤 1900 生「娯楽論」

### 3.7 まとめ

「が／の」交替をどう分析すればよいかに関して、現代日本語を対象にいくつかの提案がなされているが、近代日本語を見ると、そうした提案からは不自然であると予測される表現が見つかる。現代日本語と近代日本語ではそれぞれ表現を生成する仕組み（文法）が異なると考えれば問題はないかもしれないし、実際に異なった仕組みを有していると考えるのが妥当だろう。しかしながら、文法のどの部分がどう変わることによって、近代日本語・現代日本語の違いが生じるのかを説明する必要がある。特にこれらの日本語は連続した言語であるから、両者の文法の違いはさらに将来の日本語がどうなるかがある程度、予測できるほうが好ましい。

## 4. 考察

### 4.1 近代日本語と現代日本語の違い

2 節と 3 節で示した近代文学の用例から、現代日本語に比べ、近代日本語では、主格マーカー「の」がさまざまな環境で許されることがわかった。それに対して、現代日本語では「が／の」交替の現象が起こる環境は限られてきており、「一郎の買った靴」のような構造が典型的なパターンである。すなわち、ホストが名詞であり、主語と動詞（あるいは形容詞・形容動詞）が隣接している場合である。若い世代の話者にとって、「まで」や「より」をホストとする環境では主格マーカー「の」はかなり不自然であるという報告もある (Hammer 2015)。そこで、現代日本語においては、主格マーカー「の」の生起は名詞に埋め込まれた従属節に限定されるようになっていく、あるいはそれが基本的なパターンであると考えて議論を進めよう。すると、近代日本語がホストを特に求めない環境であるのに対し、現代日本

近代文学作品における「が／の」交替

語では名詞をホストとするということが大きな違いであると言える。

(89) 近代日本語：[<sub>節</sub>…名詞-の…]

現代日本語：[<sub>節</sub>…名詞-の…] 名詞

現代日本語の場合、「が／の」交替が起こる節は、純粹な（主）節と必ずしも同一ではない。名詞に接続する節（特に関係節）はそれ独自の特徴をもつことに注意したい。主節では「その男は一郎に {似ている／似ていた／\*似る／\*似た}」という差があるが、関係節では「一郎に似た男」が許されるといった違いがある。したがって、そうした特殊な限定された環境で主格マーカー「の」が生き残っているというのはそれほど不思議ではない。また、「の」は、「一郎の靴」のように、後続する名詞との結びつきが強いので、（ホスト）名詞が関係した環境に（主格マーカー）「の」があらわれるというのは必ずしも突飛なことではない。

近代日本語における主格マーカー「の」の自由さはどのように説明されるのだろうか。答えを出すためには日本語の歴史的な変化を詳しく見る必要があるが、本稿では大まかな分析の方向性を述べるだけにする。そもそも「が／の」交替で問題となる主格マーカー「が」と「の」はどのように生じたかという問題があるが、それについては、上代・中古日本語において従属節中の主格に限り「が」「の」が使用されたと言われている（小田 2007: 159; Frellesvig 2010 も参照）。それ以前はマーカーをつけない無助詞、ゼロ格が一般に見られたという。同時に、強調などの情動的な機能を担った係助詞が多数存在し、名詞をマークしていた。すると、そうした係助詞のいくつか（およびそれらに連動した係り結び）が消滅したことも主格マーカー「が・の」の使用と関係しているかもしれない。

野村（1993）はさまざまな観点において示唆に富む論文であるが、その中で「が・の」は独立性の高い句の主語をマークすることはないと述べている。主題と呼べるような主語は「は」でマークされるか、無助詞であったと言う。これは現代日本語を使って考えることができるかもしれない。「象は鼻が長い」は象について述べた表現だが、大主語「象」には「は」がつき、「鼻」には「が」がつく。ここから、「が」（および「の」）は、言ってみれば焦点を当てられないところにあらわれると考えることができる。

すると、従属節中における「が・の」の出現が自然なものとなる。なぜなら、一般に従属節中の要素は焦点を受けにくいからである。主節では「は」がつくのが自然であっても、従属節中では「は」がつかないほうが自然なケースもある（「一郎は会社員だ」と「一郎が会社員だということを（彼女は）忘れていた」を比較されたい）。無助詞も「は」に準じた情動的な機能を有していたとすると、従属節中では無助詞もやはり「は」と同様に出現しにくいと考えられる。（つまり「は」と無助詞は焦点を受ける、主題になるという点で「が・の」と対立する。）そうすると、焦点を受けない名詞のあとに、文法的な隙間を埋めるように、「が・の」が使用されるようになったのが自然に見えてくる。

2.6.2節で主格マーカー「の」が主節にあらわれる場合を見た。「気味の悪い！」のような表現は主題が表現されない未分化の節と考えることもできる。「ああ、腹の立つ！」のような表現も言ってみれば感情がむき出しの原初的な節の形と見なすことができないだろうか。すると「兄さんの意地悪！」といった形も節で分析される可能性が出てくる。

また、現代日本語の方言において主節に主格マーカー「の」があらわれることが報告されているが、それが中立記述だとすると、ここでの議論と無関係ではないだろう。

どの言語もその発達の中で従属節は主節が形成されてから生まれると考えるのが妥当である。(単一の節から成る主節は従属節をもたない；言語発達の初期から2つの節を合わせた形が義務的に出てくるような言語はないだろう。)言語によっては主節における文法関係の表し方をそのまま従属節に持ち込むこともあるだろう。だが、強調・焦点といった情報の観点に比重を置いた表現法が主節において一般的である場合、それを従属節にただちに持ち込むことはむずかしい。なぜならば、すでに述べた通り、情報的な観点から見て、従属節内の要素は焦点を受けないのが普通だからである。そうすると、従属節内の要素同士がまとまっていることを示すために何らかの手段が必要となる。その役割を「が・の」が担ったと考えることができるのではないだろうか。

元々の役割として「が」と「の」は2つの名詞を結びつける際に1つ目の名詞に接続したと考えられる。(ただし、「が・の」の発生は同時期である必要はなく、ある時期において似通った機能をもつようになったと考えればよい。)そして、その場合、特に接続する名詞の性質に基づいて「が」と「の」は使い分けられたとされる(尊卑による区別)。実際には「の」のほうが汎用性の高い無標であり、2つの名詞を結びつける環境では「の」が優勢となり、現代日本語につながっていると考えられる(「が」の名残は「わがチーム」などに観察されるのみ)。その一方で、「が」は節レベルで勢力を上げ、現代日本語の主格マーカーは「が」となっている。こうして「の」は名詞との結びつきが強くなり、「が」は節との結びつきが強くなるという「が・の」の棲み分けが起こっている。

近代日本語(および現代日本語)を見ると、「の」は緩やかにそれが接続する語句を後続する要素に結びつける働きをもっていることがわかる。名詞句内で格助詞「から、まで」などにも「の」がつき、「これまでの約束、母からの便り」のように名詞に繋げるのもその機能のひとつだろう。「の」が緩やかな結びつきを示す用例を下に示す。

(90) a. 掌へ載せてみると、馬鹿貝の剥身の干したのをつけ焼にしたのである。

夏目漱石 1867 生「三四郎」

b. ふろしきづつみのようにして、こわきにかかえていた、ガウンのまるめたのも、いっしょにおいてありました。

江戸川乱歩 1894 生「サーカスの怪人」

c. きとう、運送屋が、じゅうたんの巻いたのを持ってきたのだそうです。

江戸川乱歩 1894 生「サーカスの怪人」

近代文学作品における「が／の」交替

d. あとはみんな女ばかりだから、バカにしていたずらのしたいだけをして、日を送った。  
中里介山 1885 生「大菩薩峠 39 京の夢おう坂の夢の巻」

e. そりゃあもう御機嫌の取るだけ取ったと思ひ給え。 島崎藤村 1872 生「家（上巻）」  
「の」でマークされた名詞は直後の動詞とは目的語と述語の関係にある。動詞は「の、だけ」などに繋がり名詞句を形成すると考えられるが、「(名詞) の」はその名詞句に連なっていると分析できよう。これらの用例と比べて、下の用例では（環境は異なるが）動詞との関係が明確に見極められる。

(91) a. 忠綱は恩賞も何もほしくござらぬ、ただ先陣の誉れを得たいだけです、と見事に言ひ切つたので、  
太宰治 1909 生「右大臣実朝」

b. ただ自分らしいものが書きたいだけである。 夏目漱石 1867 生「彼岸過迄」

このように「の」は先行する名詞などを後続する名詞に結びつけ、まとまりを作る機能もっている。近代日本語には（現代日本語にはない）「の」と後続名詞の親和性を示す用例が見られる。

(92) a. 我々はこの自信と決心とを有するの点において普通の人間とは異なっている。

夏目漱石 1867 生「三四郎」

b. 代助は平生から物質的狀況に重きを置くの結果、ただ貧苦が愛人の満足に働かないと云う事だけを知っていた。  
夏目漱石 1867 生「それから」

c. 彼は彼の主義として、弾力性のない硬張った方針の下に、寒暑にさえすぐ反応を呈する自己を、器械の様に束縛するの愚を忌んだ。 夏目漱石 1867 生「それから」

d. けれども、相互に信仰を有するものは、神に依頼するの必要がないと信じていた。

夏目漱石 1867 生「それから」

現代日本語では、節と名詞の間に「の」を入れることはない。

意味的・語用論的特徴に基づいた「が・の」の尊卑、強調といった情動的観点に基づいた係助詞の使用というものが古い日本語の特徴であったとすると、それは統語構造的というよりも意味的・情報的な表現が表現手段の中心にあったということになる。それに対し、「が」や「の」（そして「を」や「に」）などの格助詞の多用は、文法関係や統語構造の関係性（階層性）を強く前面に押し出したものになっていると言えないだろうか。文法関係を表現によって区別するという方向での言語変化は今でも進んでいる。すでに Shibatani (1975) がいくつかの例で指摘しているように、表現形の区別による関係性の明示化は一例として「一郎が優香 {が／を} 好きだ」のような場合に見られる（動詞でないナ形容詞が「を」格目的語と共起している）。つまり、関係性を明示的に示すようになっていくというのが、日本語の変化の大きな流れではないだろうか（山口 2006 も参照）。

歴史的な観点から見た「が／の」交替については、金水ら (2011) に数箇所で言及されているので参考にされたい。また、南部 (2014) にも歴史的変遷がまとめられていて参考にな

る。

#### 4.2 主格マーカー「の」の貢献：言語処理の観点から

節と「が」、名詞と「の」の結びつきが強いのであれば、「が／の」交替における主格マーカー「の」の使用はなくてもよさそうである。あとで見ると、実際の「の」の使用は少なく、時代の変化を見ると「の」の使用は減少する傾向にある。とは言え、主格マーカー「の」には典型的なパターンにおいて有用性がある。少なくとも、著しく不便を感じさせることがないことを特に言語処理の観点から考えてみたい。

まず、主格マーカーではない格助詞「の」を考えてみよう。単純なパターンは「一郎の靴」のような場合である。日本語に慣れたある段階において、「一郎の」という表現を聞くとその時点であとに別の名詞が続くと予測できるようになる（形容動詞「きれいな」と同様に）。議論をわかりやすくするために、まず形容動詞の連体形「きれいな」で考えてみよう。

(93) a. [形きれいな]

b. [名詞句 [形きれいな] …名詞]

「きれいな」に出あうと、そのあとに名詞が（直後でなくとも）あらわれることがわかる。つまり、その時点で「きれいな」が名詞句に含まれることがわかる。（そして、出あう主要部名詞と適切に意味関係が結ばれれば解釈ができたことになる。）言語によるコミュニケーションの基本は、話者が言語で表現したものを同じ形で聴者に伝えることにある。話者が生成した表現の構造がきちんと聴者側で再現されることが大切である。すると、統語構造を作り上げるための手がかりも重要となる。「きれいな」という形が名詞を予測するのは正確な統語表現を作り上げる助けのひとつとなる。これは「一郎の靴」などにおける「一郎の」についても同様である。

(94) a. [名詞<sub>1</sub> 一郎の]

b. [名詞句<sub>2</sub> [名詞<sub>1</sub> 一郎の] …名詞<sub>2</sub>]

すなわち「一郎の」があると、別の名詞があとにあらわれることが予測できる。（「それ、一郎の！」という表現もあるので、必ずしもその予測が成り立つわけではないが。）「一郎」とは別の名詞が来て、それと適切な解釈ができればいいわけだが、その別の名詞と出あわずしてその存在が予測できることが「の」の役割でもある。

上で見た「きれいな」と「一郎の」はそれぞれ「きれいな花」や「一郎の靴」というように直後に名詞が来て、それと適切な意味関係が結ばれれば統語処理・意味処理が済むことになる。それでは「一郎の赤い靴」と「赤い一郎の靴」の場合はどのようになるだろうか。ともに日本語としては自然であり、どちらかが言語処理的に負担が著しく大きいとは感じないのではないだろうか。まず「一郎の赤い靴」から考えよう。

(95) a. [名詞<sub>1</sub> 一郎の]

近代文学作品における「が／の」交替

- b. [名詞句2 [名詞1 一郎の] …]
- c. [名詞句2 [名詞1 一郎の] [形赤い] …]
- d. [名詞句2 [名詞1 一郎の] [形赤い] [名詞3 靴] …]
- e. [名詞句2 [名詞1 一郎の] [名詞句3 [形赤い] [名詞3 靴]] …]
- f. [名詞句3 [名詞1 一郎の] [名詞句3 [形赤い] [名詞3 靴]]] (名詞2=名詞3)

形容詞「赤い」と出あっても「一郎の」とは結びつかない。意味的に繋がらないからである。そのまま「靴」と出あうことになるが、そこで隣接した「赤い」を「靴」と結びつけることができる。そして、それは「靴」を主要部とする名詞句を形成する((95e))。先の「一郎の」は名詞を待っているわけであるが、「赤い靴」の「靴」をその名詞と考えることにより、「太郎の」が待っていた名詞が決定することになる。「太郎の」と「赤い靴」が適切な意味解釈を受ければ、表現全体が処理されたことになる。

では「赤い一郎の靴」を考えてみよう。

- (96) a. [形赤い]
- b. [形赤い] [名詞1 一郎の]
  - c. [形赤い] [名詞句2 [名詞1 一郎の] …]
  - d. [形赤い] [名詞句2 [名詞1 一郎の] [名詞3 靴] …]
  - e. [形赤い] [名詞句3 [名詞1 一郎の] [名詞3 靴]] (名詞2=名詞3)
  - f. [名詞句3 [形赤い] [名詞句3 [名詞1 一郎の] [名詞3 靴]]]

「赤い」が「一郎(の)」と出あっても、2つは構成素を成さない(意味的に繋がらないと判断されるから)。「一郎の」は、上で見たのと同じように、他の名詞を予測し、その名詞句に含まれることを予測する。「靴」と出あい、意味的に結びつきが問題なければ、「一郎の靴」は構成素を成す((96e))。「赤い」は未処理のままだが、それを名詞句3に結びつけ、「赤い」と主要部「靴」を結びつけることができれば、「赤い」は名詞句3に包含されることになる。この場合「赤い」は「靴」と出あって初めて「赤い」の前に名詞句3の境界があることがわかる。あるいは、日本語に慣れてくると以下のような処理が可能になるかもしれない。

- (97) a. [形赤い]
- b. [形赤い] [名詞1 一郎の]
  - c. [名詞句3 [形赤い] [名詞句2 [名詞1 一郎の] …] …]
  - d. [名詞句3 [形赤い] [名詞句2 [名詞1 一郎の] [名詞4 靴] …] …]
  - e. [名詞句3 [形赤い] [名詞句4 [名詞1 一郎の] [名詞4 靴]] …] (名詞2=名詞4)
  - f. [名詞句4 [形赤い] [名詞句4 [名詞1 一郎の] [名詞4 靴]]] (名詞3=名詞4)

経験から、形容詞が後続の名詞と直接的に結びつかない場合、その形容詞は別の名詞の投射(名詞句3)に包含されると予測するかもしれない(「赤い」は終止形でなければ連体形とな

るしかないから)。すると、早い時点で「赤い」の前に名詞句の境界があることがわかる。(同時に名詞句2の予測もされるものとして示したが、別々にしてよいかもしれない。)以降、名詞3と名詞2が何かという計算になる。

「一郎の赤い靴」も「赤い一郎の靴」も語数が少ないので、どちらでも言語処理上はそれほど差はないと考えられる。言語処理で問題となるのは、処理されない語が処理されないまま、他の語の処理が進む場合である。他の語の数が増えれば増えるほど処理に負荷がかかる。なぜならば、他の語を処理しつつ、作業記憶に未処理の語が蓄えられた状態が続くからである。そして、未処理の語の数が増えれば増えるほど処理に負荷がかかる。「一郎は二郎が三郎が怪我をしたと思っていると信じている」と「三郎が怪我をしたと二郎が思っている一郎は信じている」を比べると、後者のほうが明らかに理解しやすい。これは「一郎は」を適正に処理するためには「信じている」を待たなければならないのであるが、前者では「信じている」に出会うまでに他の語の処理をしなければならず、なおかつそこに「二郎が」も未処理にしたまま、さらに処理を続けなければならないという負担が加わる。後者では「二郎が」が出るとすぐに「思っている」と出あい処理が終わり、「一郎が」が出てくるとすぐに「信じている」と出会う。未処理の語句をなるべく少なくすることが言語処理上は有利である。

ここで「一郎の買った靴」を考えてみよう。ここでも、ある程度、日本語の処理に慣れた段階を仮定し、節が名詞に接続する場合、主語が「の」でマークされることが可能であるという知識をすでに備えていると考える(つまり「ぼくの読んだ本」が日本語として自然であると判断ができる段階)。すると、最終的にどのような構造であれ(「それ、一郎の!」をのぞき)、「一郎の」が出た時点でそれが他の名詞を主要部とする名詞句に支配されるという予測ができる(「一郎の赤い靴」と同様)。

(98) a. [名詞<sub>1</sub> 一郎の]

b. [名詞句<sub>2</sub> [名詞<sub>1</sub> 一郎の] …]

参考: [名詞句<sub>2</sub> [節 [名詞<sub>1</sub> 一郎の] 買った] 靴<sub>2</sub>]

ここでなぜ主語と動詞(用言)の間に介在する要素が少ないほうがよいのかが見えてくる。名詞句「一郎の買った靴」の主要部が具体的に決まるのは名詞「靴」に出あった時である。仮に、節の先頭に「一郎の」があり、そのあとに「きのう」「優香と一緒に」「銀座の有名店で」のような語句があった場合、「買った」および最終目標である「靴」にたどり着くまでに、「一郎の」によって予測された「名詞句2」の主要部(名詞2)が何であるかを未処理のまま常に宙ぶらりんの状態にしておかなければならない。そのような状態は好ましくないが、これは動詞の直前に「一郎の」を置くと生じない。なぜなら、「一郎の」があらわれて初めて「名詞句2」の存在がわかるからである。こうしたことを考慮すると、未処理のプロセス(時間)が最も短いのは、主格マークされた主語と用言(動詞・形容動詞・形容詞)の距離

が最少の場合、すなわち介在する要素がゼロの場合である。このように、言語処理の観点から、「の」でマークされた主語と用言の間に別の要素がないのが好まれると考えられる (Shibatani 1975 など参照)。「きのう優香と一緒に銀座の有名店で一郎の買った靴」のほうが「一郎のきのう優香と一緒に銀座の有名店で買った靴」よりも明らかに理解しやすいのは (実際、後者は「\*」)、前者では動詞の前の「一郎の」と出あった時点で初めて「名詞句 2」が存在することがわかるが、後者の場合、節の最初の時点で「名詞句 2」が形成されてしまい、その主要部を求めながら、他の語句を処理しなければならない。繰り返すと、理解しやすい前者の表現では、最後の 3 語が重要であり、そこで全体の構造 (名詞句) が作られる。そこまでは通常の節を処理するやり方でよいのである。対して、「一郎の」から始まる後者の表現では最初に全体が名詞句であることを予測してしまい、未処理のまま、他の語を処理していかなければならない。もちろん、「一郎の」を所有の意味でとらえ「きのう優香と一緒に銀座の有名店で買った一郎の靴」と同義であると分析することも可能だが、主要部が最後に来る言語 (パターン) においては長い構成素を短い構成素よりも前に置くほうが言語処理上、問題が少ない。同じ意味であっても、「きのう優香と一緒に銀座の有名店で買った一郎の靴」のほうが「一郎のきのう優香と一緒に銀座の有名店で買った靴」より理解しやすいのも言語処理的な理由である (Hawkins 1996 などを参照されたい)。

「が／の」交替に言語処理が大きく関与していることは次の例を比較することにより実感できるかもしれない。

(99) a. 翼の折れたエンジェル

b. 翼の折れた鉛筆

ともに「翼の」と「折れた」という表現があらわれているが、それだけで決定的な解釈をすることはむずかしい。最終的に、(99a) は主格マーカー「の」となるが、エンジェル (天使) に翼が生えているという知識があることで (翼は天使の身体の一部)、その天使の翼が折れているという解釈につながる。一方、(99b) は、鉛筆には羽がないため、「翼」と「折れた」を結びつけて解釈できない。したがって「翼」の解釈が宙ぶらりんになるが、それが固有名詞 (人名) であると気づけば「(折れた) 鉛筆」と結びつけて解釈することができる。

まとめると、句構造の全体像は短距離 (少ない語数の情報) で決まるほうが言語処理上の負担が少ない。節の述部である用言の直前に「の」でマークされた主語があらわれると、その時点で節全体が名詞句に支配されることがわかる。そのあとに用言、そしてホスト名詞が続き、節はホスト名詞と結びつけられ、解釈を与えられる。以上、主語と用言の間に介在する構成素がないほうがよいのは言語処理上の理由であることが示唆された。

節内に主格マーカー「の」があらわれるとその節があとに来る名詞を待つことを予測することは次の用例からも裏付けられよう。名詞を待つ節は節全体が修飾語と同様になるから、それらを連続することが可能であることを次は示している。



- (100) a. 眉の美しい, 色の白い頬の豊かな, 笑う時言うに言われぬ表情をその眉と眼との間にあらかず娘だ。 田山花袋 1872 生「少女病」  
 b. 目の大きな, 鼻の細い, 唇の薄い, 鉢が開いたと思うくらいに, 額が広くって顎がこけた女であった。 夏目漱石 1867 生「三四郎」

こうした用例は現代日本語から見ても特に問題はないと思われる。これらの用例では節の直後にホスト名詞が来ることなく、主語が「の」でマークされた節が連続している。修飾する側の節が連続しているのは形容詞が連続した「若い美しい人」「若くて美しい人」と同様である。それぞれの（共通の）ホスト名詞を待つという状況は、複数の修飾要素が（共通した）非修飾要素を待つ状況と同じである。主格マーカー「の」があることで、節が修飾要素であることを示すという機能が上記の用例では発揮されている。

「一郎の」のような形が他の名詞を予測しそれと結びつきたがることは、次の例を見るとわかる。

- (101) a. (?\*) 父親の大音楽家であった物理学者 (Harada 1971 (15b))  
 b. (?\*) 人口の500万だった都会 (Harada 1971 (16b))

これらは「の」でマークされた主語のあとに名詞述語が続く例だが、Harada では新しい世代においては容認度が落ちると報告された。（おそらく現在では「\*」がつけられるだろう。）近代日本語にもそうした用例が見つかる。まずはそのうちいくつかを文脈から切り離して提示する。どのような解釈を与えるか考えてみるとよいだろう。

- (102) a. そこに住んでいる人の先生の家族でない事も解った。  
 b. 先生の避暑地を引き上げたのはそれよりずっと前であった。  
 c. 私は奥さんの女であるという事を忘れた。

現代日本語では上の用例に主格マーカー「の」があるとは気づきにくいのではないだろうか。上はすべて夏目漱石の「ころ」から採集した用例である。解釈がしやすいように文脈とともに下に示すことにする。

- (103) a. 私はその晩先生の宿を尋ねた。宿といっても普通の旅館と違って、広い寺の境内にある別荘のような建物であった。そこに住んでいる人の先生の家族でない事も解った。私が先生先生と呼び掛けるので、先生は苦笑いをした。  
 夏目漱石 1867 生「ころ」  
 b. 私は月の末に東京へ帰った。先生の避暑地を引き上げたのはそれよりずっと前であった。私は先生と別れる時に、「これから折々お宅へ伺っても宜ござんすか」と聞いた。  
 夏目漱石 1867 生「ころ」  
 c. 奥さんに対する私にはそんな気がまるで出なかった。普通男女の間に横たわる思想の不平均という考えもほとんど起らなかった。私は奥さんの女であるという事を忘れた。私はただ誠実なる先生の批評家および同情家として奥さんを眺めた。

夏目漱石 1867 生「こころ」

d. 表は三四郎の宛名の下に、迷える子と小さく書いたばかりである。三四郎は迷える子の何者かをすぐ悟った。

夏目漱石 1867 生「三四郎」

e. 私がKに向って、この際何んで私の批評が必要なのかと尋ねた時、彼はいつもにも似ない悄然とした口調で、自分の弱い人間であるのが実際恥ずかしいといいました。

夏目漱石 1867 生「こころ」

f. 私が両親を亡くしたのは、まだ私の廿歳にならない時分でした。

夏目漱石 1867 生「こころ」

以上の用例では名詞が述語として使われているが、その前の主語が「の」でマークされていても、現在では、主格と取るのではなく、名詞に連なる格助詞「の」と取るのが自然になっているのではないだろうか。このことは現代日本語において「の」の格助詞としての機能が優勢（基本）であることを示している。

それでは、近代日本語ではどうして上で示したような例が可能だったのだろうか。一つには、「の」と名詞の結びつきが現代日本語ほど強くなかったということが考えられる。だからこそ、本稿で示したようなホストが名詞でない用例もたくさん見つかるのであろう。また、近代日本語では、文脈を考慮しながら、主格マーカー「の」か格助詞「の」かを見極める必要があったが、そうした技能を近代日本語の使用者は求められていたことになる。

#### 4.3 主格マーカー「の」の行方

通時的な観点から主格マーカー「が」と「の」を比べると、「の」よりも「が」が好まれるようになってきている。山本（2007）によれば、明治期・大正期・現代の文学作品を見ると、主格マーカー「の」の割合は69% → 52% → 37%と減少していると言う（母数：明治期 650 例、昭和期 683 例、平成期 764 例）。南部（2014）は「国会会議録」と「日本語話し言葉コーパス」を基に「が／の」交替を分析しているが、「の」の生起率はそれぞれ12.5%、7.9%ほどだと言う。そして、特に前者のデータにおいて、世代と「の」の使用率の間の相関関係が強いことを示している。新しく生まれた人ほど、主格マーカー「の」を使う傾向が低くなっているのである。Harada（1971）は主格マーカー「の」に対する寛容性がなくなり、「の」の使用域が減じることを予測したが、その通りになっている。

こうした事実を見た場合、主格マーカー「の」は将来的にどのようなようになっていくと予想できるだろうか。南部（2014）は「太郎の買った本」は以下のような構造分析が可能で、その場合は疑似的な「が／の」交替であると言う。

(104) 太郎の [pro 買った] 本

この場合「太郎の」は直接「本」を修飾する。pro は音形として実現されないが構造上存在すると仮定される主語である。これは「太郎の本」が可能であることからそうした分析が成

り立つと考えられる。「太郎の」がなく、proが「太郎が」として実現すれば「太郎が買った本」となるが、同じ主語を「が／の」がマークするのではないので、ここでの「が／の」交替は見かけ上のものであり疑似的である。ここから、南部は、真の「が／の」交替（節内で主格マーカー「の」が用いられる場合）は、事実として減少しているが（南部2014のデータなどを参照）、この疑似的「が／の」交替があるため、消失したものと見えるようにはならないと考える（韓国語がその証左であると言う）。

しかし、本当にそうだろうか。たとえば「忌憚のない意見」という表現と「忌憚がない意見」を比べた場合、前者のほうが自然であると考えられる日本語使用者は多いのではないだろうか。理由のひとつには「忌憚」を単独で使うことが日常的に（少）ないからであろう（つまり慣用表現のようになってきている）。「忌憚がない」という表現は事実として見られるが、肝心なのは「忌憚」が否定表現と共起することである（「忌憚ない」「忌憚なく」にも注意）。したがって、「忌憚のない意見」を疑似であると分析することはむずかしい（また「忌憚の意見」とは言わない）。そうした表現は決まり文句だから研究対象から外すべきなのだろうか。だが「当たり障りのない話」「屈託のない笑顔」「差し障り {の／が} ない範囲で」なども考えると、決まり文句とすべきか否かの境界を引くことはむずかしい。

言語使用の実態として、英和辞典などでどのような訳語が与えられているかを考えた場合、その中に「(名詞) の (用言)」という日本語訳が与えられることにも注目したい。たとえば、childlessには「子どものない」、fruitlessには「成果のあがない」、wittyには「機知のある、気のきいた」といった日本語を対応させている。これらは主格マーカー「の」と用言が構成要素を成すことを示しており、かつ、日本語使用者の日本語に関する知識の中で「子どものない」と「子どもがない」が比較的自由に入れ替わること示しているのではないか。

それでは、現実として主格マーカー「の」の使用が減少していることはどのように説明されるのだろうか。先に見たように、現代日本語（あるいは現在の現代日本語）では次のようなパターンが典型的な「が／の」交替の環境として存在すると考えられる。

(105) 節 [名詞<sub>1</sub>の] 用言 名詞<sub>2</sub>

現代日本語では、古い日本語で多用された係り結びは消滅し、(主)節においては「が・を・に」といった格助詞を用いることで文法関係を示すのが一般的である。そうした節における表示方法を従属節まで拡げることは主節の句構造規則の一般性を高めることになり、特別なことを覚えなくてよいことに繋がる（近代日本語で従属節内に主格マーカー「の」が頻出したことを思い出してほしい）。換言すると、節という環境における主格マーカーは「が」だけで済むことになる。（「まで」「より」などの従属節でも、「が」が圧倒的になると予想できる。）一方で、「の」は（格助詞として）名詞との結びつきが深いということがあり、名詞前の従属節においては、「が」と「の」が競合し、ささやかな抵抗を示していると考えられる。（(105)の環境では言語処理上の負担は「が」でも「の」でも大差ない。）

その競合の中で、主格マーカー「の」の出現が意味的に制限されていく可能性がある。それは（格助詞）「の」が結びつくの<sub>ノ</sub>が一般に名詞であり、「が」が結びつくの<sub>ガ</sub>が節であることと関連している。大雑把に言うと、名詞はモノを指し示し、節はコト（event；事象）を指し示す。（「アメリカ大統領」のような表現もあるが）通常、名詞が指し示すモノは恒常的であるから、それを修飾する要素は一時的な時空間に位置づけられるコト的な要素であるよりも、ある程度、持続性のある要素、つまり状態をあらわす要素のほうが好まれるのではないか。換言すると、「の」は（格助詞であれ主格マーカーであれ）被修飾名詞との結びつきが強いので、主格マーカー「の」を含む節も、名詞が指し示すモノを修飾するのにふさわしい「状態」をあらわす節が好まれることになるのではないだろうか。主格マーカー「の」は勢力を失いつつあるが、そうした状況において「の」の本質的な部分が見えてくると考えられる。他方、「が」は節と強く結びついており、節は一般に特定の時空間に固定されるコトをあらわすから、ここに名詞前における2つの節（「の」を含む節と「が」を含む節）の意味的な違いが生じる。言い換えると、主格マーカー「の」が節内に出現する場合、その節はコトではなく状態をあらわすほうが相性がよいことになる。すると、述部（用言）によって「が／の」交替に違いが見られる可能性があるが、実際、南部（2014）はどのような述語が主格マーカー「の」と出現するか分析している。

(106) 形容詞 > 存在動詞（ある・ない） > 形容動詞 > 動詞 > コピュラ

（南部 2014: 23）

具体的に「の」の生起率は形容詞が 27.8%，存在動詞（ある・ない）が 12.4%，形容動詞が 11.8%，動詞が 10.6%，コピュラが 0.8% であると言う（コピュラについては後述）。形容詞や「ある」「なし」は状態を示すのが普通で、動詞はコトをあらわすことが多いので、この分析はここでの仮定を支持するものと考えられる。ここでの仮定はさらに次の容認差を説明する。

(107) a. [突然シミ {が／\*の} ついたシャツ] を見せてください。

（Miyagawa 2011 (51)）

b. 運転している間に泥 {が／??の} ついたシャツ （Miyagawa 2011 (52a, b)）

ともに「シャツ」を修飾する節は特定の事象をあらわすものである。主格マーカー「の」は状態をあらわす節内で出現するほうが据わりがよいため、こうした場合（特定の<sub>ノ</sub>と結びつく他の表現が節内にある場合）には嫌われる。一方、「が」はコトをあらわす表現と深く結びついているから、上記では「が」のほうが自然なのである。言うまでもなく「シミのついたシャツ」は問題のない表現である。これは「シミのついた」が「シャツ」の属性をあらわす解釈を想起するからである。用言が動詞の場合でも、どのような動詞がどのような形になっているかを考慮すると、さらに一般性が見えるかもしれない（たとえば「気の利いた男」など）。同時にホスト名詞についても形式的な「こと」「の」ではどうかといったことを

調べる必要があろう。

状態をあらわす節に「の」があらわれやすいとすると、名詞述語（コピュラ）もそうではないかと考えるかもしれない。だが、それは言語処理の観点から、「(名詞)の(名詞)」をひとまとまりの名詞句と処理するのが優勢なので、「父親\_\_大音楽家であった物理学者」では「の」よりも「が」が好まれると考える。実際、次のような場合、主格マーカー「の」なのか格助詞「の」なのか判断に迷う。

(108) それらのアカシアの花ざかりだった頃は、その道はあんなにも足触りが軟かで、新鮮な感じがしていたのに、堀辰雄 1904 生「美しい村」  
「それらのアカシアの花ざかりだった頃」が主格マーカー「の」であるかは判断しがたい（文脈からおそらく主格マーカー）。あるいは近代日本語においてはそれでよかったのかもしれない。

以上のことから、「が／の」交替については、その使用頻度は少なくなるとしても疑似「が／の」交替だけが残るとは考えない。そして、節内において主語が「の」でマークされるパターンは意味的に制限されていくと考える（山本 2007 も参照）。

#### 4.4 近代日本語で起こったこと

わずか百年ほど前の日本語と現在の日本語ではそれぞれの文法内に異なった部分があることが「が／の」交替の現象を見ることでわかった。どうしてこのような（おそらくは急速な）変化が起こっているのだろうか。まずは、近代日本語を生み出した言文一致運動を抜きに語ることはできないだろう。明治期を中心に書き言葉を対象に日本語の表現が改革・洗練されていった（森岡 1999, 今野 2012, 2014 などを参照）。そうした書き言葉は話し言葉にも影響を及ぼし、それがまた書き言葉にも影響を与え、持ちつ持たれつ現代日本語に繋がっていったと考えられる。したがって、日本語の大きな流れを見るなら、明治期以降の日本語の変化が今も続いていると考えられるのではないだろうか。

言文一致運動を触発したきっかけのひとつとして西洋語との接触がある。日本語とは語順その他が大いに異なる西洋語に接して、近代日本語の使い手は何とかして同様の表現をしようと試みた。書き言葉と話し言葉の問題だけでなく、さまざまな部分で影響を受けたことだろう。たとえば、主語・目的語などを明確にあらわそうとしたり、代名詞を明示化したりしたことだろう。時代を経て、それは「が・の」の棲み分けに繋がり、現代日本語になってその棲み分けはさらに進んでいると考えられる。日本語は文法関係を格助詞であらわす言語になり、格助詞間の違いをさらに明確にしようという力も進んでいる（Shibatani 1975）。その背後には（さまざまな意味での）両義的・多義的な解釈を避けようとする心理が働いているのだろう。いわゆる「ラ抜きことば」が生じたのも、背後に尊敬と可能を明確に区別しようとする動機があるように（井上 1998）。

## 近代文学作品における「が／の」交替

本稿で取り上げた用例はすべて書き言葉であった。したがって、近代日本語の書き言葉に通じているということは、現代人であっても、現在の現代日本語を操りながら、百年前の日本語に接するということである。結果として、そうした人が（「が／の」交替に関して）有する日本語の知識は、近代日本語・現代日本語をあまり意識することなく、多くの表現方法に対して寛容となるであろう。「が／の」交替の研究をむずかしくしていることのひとつに、表現に対する判断に個人差があることがある。これは Harada (1971) や Shibatani (1975) がすでに指摘していたことであるが、流れの中にいながらその流れをとらえるのは実際に困難である。書き言葉は時空間を超えて存在するため、話し言葉だけの状況とは違って（そうした書き言葉に接する限り）少し前の時代の表現も自然と感ずることになる。個人がどのような言語を入力としてきたか、「が／の」交替については昔の書き言葉にどの程度、接してきたかが、現代日本語使用者の一人ひとりの文法に少なからず影響を与えているはずである。現代日本語の使用者が主格マーカー「の」に関して寛容である場合、それは近代日本語との一種の言語接触における結果であるとも言える。逆に言うと、現代日本語の使用者が（近代日本語に見られたような）さまざまな主格マーカー「の」の用法に対して寛大であるためには、書き言葉に積極的に触れる必要があるだろう。だが、若年層の読書離れが叫ばれる昨今、近代文学作品を読まない（読めない）現代日本語使用者は増えていくことだろう。それは文法的な観点だけが問題なのでなく、そこに描かれている文化的な背景も異なってきているからである。たとえば「書生」というような存在が許された社会を今の若者たちは想像できるのだろうか。その意味で、近代日本語の現代日本語に対する影響は減少し、「が／の」交替が見られる環境は近い将来、極めて限定されたものとなるであろう。

\*本研究は東京経済大学 2017 年度個人研究助成費（研究課題番号：17-19）による研究成果の一部である。

### [ 参 考 文 献 ]

- Akaso, Naoyuki, and Tomoko Haraguchi. 2011. "On the categorial status of Japanese relative clauses." *English Linguistics* 28: 91-106.
- Frellesvig, Bjarke. 2010. *A History of the Japanese Language*. Cambridge University Press.
- Hammer, Ida. 2015. *The Nominative/Genitive Alternation and Subordination in the Japanese Language*. Bachelor's thesis. Lund University.
- Harada, Shin-ichi. 1971. "Ga-No conversion and idiolectal variations in Japanese." *Gengo Kenkyu* 60: 25-38.
- Harada, Shin-ichi. 1976. "Ga-No conversion revisited: A reply to Shibatani." *Gengo Kenkyu* 70: 23-38.

- Hawkins, John A. 1996. *A Performance Theory of Order and Constituency*. Cambridge University Press.
- Hiraiwa, Ken. 2005. *Dimensions of Symmetry in Syntax: Agreement and Clausal Architecture*. PhD dissertation, MIT.
- Maki, Hideki, and Asako Uchibori. 2008. "Ga/No conversion." In *The Oxford Handbook of Japanese Linguistics*, ed. by Shigeru Miyagawa and Saito Mamoru, 192-216. Oxford University Press.
- Miyagawa, Shigeru. 1993. "Case-checking and Minimal Link Condition." In *MITWPL 19: Papers on Case and agreement II*, ed. by Colin Phillips, 213-254. MIT Working Papers in Linguistics.
- Miyagawa, Shigeru. 2011. "Genitive subjects in Altaic and specification of phase." *Lingua* 121: 1265-1281.
- Miyagawa, Shigeru. 2012. *Case, Argument Structure, and Word Order*. Routledge.
- Miyagawa, Shigeru. 2017. *Agreement Beyond Phi*. MIT Press.
- Ochi, Masao. 2001. "Move F and ga/no conversion in Japanese." *Journal of East Asian Linguistics* 10: 247-286.
- Ochi, Masao. 2017. "Ga/No Conversion." In *Handbook of Japanese Syntax*, ed. by Masayoshi Shibatani, Shigeru Miyagawa, and Hisashi Noda, 663-700. De Gruyter.
- Saruwatari, Asuka. 2016. *Nominative and Genitive Cases in Japanese: From Dialectal and Cross-Linguistic Perspectives*. PhD dissertation, Osaka University.
- Shibatani, Masayoshi. 1975. "Perceptual strategies and the phenomena of particles conversion in Japanese." In *Papers from the Parasession on Functionalism*, 469-480. Chicago Linguistic Society.
- Watanabe, Akira. 1996. "Nominative-genitive conversion and agreement in Japanese: A cross-linguistic perspective." *Journal of East Asian Linguistics* 5: 373-410.
- 井上史雄 1998 『日本語ウォッチング』 岩波書店
- 小田勝 2007 『古代日本語文法』 おうふう
- 加藤彰彦・佐治圭三・森田良行 (編) 1989 『日本語概説』 おうふう
- 金水敏・高山善行・衣畑智秀・岡崎友子 2011 『文法史』 岩波書店
- 今野真二 2012 『百年前の日本語——書きことばが揺れた時代』 岩波書店
- 今野真二 2014 『日本語のミッシング・リンク江戸と明治の連続・不連続』 新潮社
- 南部智史 2014 『コーパス言語学および実験言語学に基づく格助詞交替の分析』 大阪大学博士論文
- 野村剛史 1993 「上代語のノとガについて (上・下)」 『国語国文』 62. 2: 1-17, 62. 3: 30-49.
- 森岡健二 1999 『欧文訓読の形成—欧文脈の形成—』 明治書院
- 山口仲美 2006 『日本語の歴史』 岩波書店
- 山本智佳子 2007 「格助詞『が・の』の構文的考察」 『國文學論叢』 52: 78-96. 龍谷大学